
野球馬鹿の破茶目茶物語

エンゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球馬鹿の破茶目茶物語

【Zコード】

Z8083Z

【作者名】

エンゼル

【あらすじ】

パワポケの一次創作です。夏目准が同級生にしたり、主人公がチートだつたり、いろいろ勝手ですが頑張っていきます。主人公、黒崎京介（パワポケ13主）を中心に起くる様々な出来事をパワポケならではの個性豊かなメンバーで過ごす野球物語です（あまり野球しないけれど）。キャラクターの性格は変えませんが年齢、設定、家庭事情は原作と違つことがあります。ご注意ください。

1回表 親切（前書き）

パワポケの一次創作で、いろいろなことをするオリジナル？ストーリーです。

なかなかパワポケの一次創作って見付からないので、ちょっとチャレンジをしてみました。

まだまだ初心者ですがよろしくです。

1回表 親切

俺は親切高校野球部の一員だ。と言つても全寮制じゃないし、ペラ
という制度もない。普通の高校だから勘違ひしないでほしい。まあ、
オリジナルの高校だと思ってくれ。といつか、若干メンバーにも無
理があるが気にしないでほしい。夏目准を同級生にするつづーのも
キツいんだ。簡潔に話すと何もかもオリジナルだ。

「京介?..どうしたんだ?」

「.....優輝か?ふああ.....眠いなあ」

俺は黒崎京介。親切高校の.....つてもう言つたか。時期は高校2
年生で夏の大会が終わり先輩が引退したばかりの時だ。キャプテ
ンは誰にするか迷った結果、俺になつたのだが.....。

「キャプテンなんだからもうちょっと指示だしてよ。いきなり2日
連続自主練はちよつと.....」

「イツは雨崎優輝。俺と同じで野球部、しかもエースだ。俺はキャ
ッチャーだからバッテリーを組んでるってわけだ。球速も凄いし、
変化球も凄いのにこの弱気な性格は何とかならないのか?」

「俺にだつて考えがあるんだよ。いきなり張り切つてキツい練習より、俺がキャプテンになつたことを皆に馴染ませないとな」「寝てたじやないか……」

親切高校の野球部は強いらしいのだが、ここ数年はベスト16止まりだからな。

「先輩のためにも練習しようよ
「はいはい。わかったよ」

とりあえずオリジナル版親切高校の説明をしつべく。小学校、中学校、高校が全部敷地内にあり、体育館やらグラウンドが別なのでものすごい広いわけだ。俺も親切小学校から親切高校までの10年間は同じ通学路を歩いている。勉強よりもスポーツに力を入れている学校だ。

「本当に京介はマイペースだね……
「ただ単にどうしたらチームをまとめれるか考えてただけだぜ?」

で、結局は自主練といつもサボっていた。明日からはコーチも来るから無理だけどな。解散となり変わらずの通学路を歩き帰った。いつもなら妹に飯を作るのだが友達の家に泊まるらしいから、適当に飯を食つて寝よう……。

翌日の朝。出かける準備をしている最中、呼び鈴が鳴った。誰だ？

「どうやら様？」

「私だよ、千羽矢だよ」

優輝の妹の雨崎千羽矢。優輝とは幼なじみだから、一応幼なじみだ。

「チハか？どうした？」

「一緒に学校行こうよっーーー！」

「いいけど、珍しいな？チハが俺の家に来るなんて」

「たまには京介君と話しながら学校行きたいなって思つただけだよ？」

チハは俺のイメージでは小悪魔つて奴かな。小さい頃からよくからかわれていたんだ。野球部のマネージャーでもあり、「可愛いマネージャーがいるから俺は頑張れるぜえっーーー」とか言つてる先輩もいたもんだ。

「何だ？話でもあるのか？」

「まあねー。お二イともめちやつたからねえー」優輝とチハは仲が良いのであまり喧嘩はないのだが、もめることは多々ある。

「放つておくのもどうかと思うから話を聞かせてくれないか？」

「聞いて聞いて！先輩にさげられたんだけど、しつこいから『私には心に決めた人がいるのーー』って言つたの」

「んで、それが優輝の耳に入つて聞かれた……とか？」

「あつたりーーーお二イつたら本当に心配性なんだか……」「優輝らしいなあ……」

俺は恋愛系の話は苦手なんだけどな。まだ1回も女子と付き合っていない。野球一筋だった俺に女子と触れ合う機会が無かつたからな。

「京介君にはいないの？好きな女の子」

「考えたこともなかつたな」

「むー、勿体ないよ。京介君カツ『コいにの』」

「そりや、ありがとよ」

「本心なのに……」

自分のルックスは他人から見たらどうなのだろうか？自分の性格は他人からはどう思われているのか？きっと好きな人がいるのなら、それを考へているんだと思う。だが、俺は全部野球で主張してきた。その俺が他人の恋愛事に首をつっこむなど持つての他だ。

「チハにはいるんだろう？心に決めた人が」

「それは言葉のあやつてやつだよ」

チハは目をそらす。嘘をついてるのだろうか？しかし、これ以上聞くのも失礼だろう。

「…つ！？」

「どうしたの？京介君？」

「俺の本能が『早くここから逃げろ』って指示してるんだ」

「……何それ？」

きつとこれは合図だ。俺を中心とした半径100メートルにアイツが入ったのだろう。しかも走ってきてる。俺も走らなければ捕まってしまう！

「チハ、悪い！先に行く！！」

「えっ？あ、うん」

俺は走りだした。けれど遅かったようだ。突然、肩に『ガシッ』といふ音が鳴り進むのが遅くなつた。

「朝ぐらいゆつくりさせてくれよ……梨子」

「な～に言つてんのよーもづちょっとで夏休みなんだからねつー」

石川梨子。幼なじみで、天下のトラブルメーカー。常日頃からトラブルを起こし、俺がその場を収めているから1番俺が大変なんだ。

「まあ、俺も楽しみなんだけどさあ」

「早く教室に行つて海に行くメンバー誘おうよ」

夏休みのお盆で海に行く予定がある。初めてではないが、幼少の頃だからちゃんと覚えているわけではない。海での思い出もほしいんだよな。

「行くよつー京介！」

「わかつてゐから引つ張るなよー、梨子」

梨子に引っ張られて学校に向かう俺ら。

「お似合いのカップルだと思つんだけどなー」

後ろから聞いたチハの独り言は風の音にかき消された。

「その日は忙しいんだ、悪い京介」

「別にいいぜ、優作」

野球部のやつらは全滅だつた。というかその日はお盆以外で唯一の部活が休みであり、皆はその日に用事をいれていた。

「京介！メンバー集まつたよ！！」

「早つ！？まだいなんだけど！？」

「えつー？京介使えない」

梨子に使えないと言わると地味に心が痛い。いつもお前のトラブルを処理してるのは誰だと思っているんだ。

「誰が来るんだ？」

「あたし、夏菜、漣だね」

霧生夏菜は梨子の親友？みたいな人で、性格は優輝より男っぽいのかな？浅井漣は神桜中出身の人で天然系というのかな？まあ、そんな人だ。

「京介！お前、海に行くつて本当か！？」

「うおつ！？いつからいたんだよ越後！？」

「あれ、越ゴリラだ」

越ゴリラ。説明省略。

「俺も海に行きたいぜええ！！」

一 梨子と霧生が許す次第だかいんじやないか？」

恩に着るぜ！」

「ちょっとーー越ゴリラーーあたしたちが行くのは海水浴場なのよ

金云川集

備はそこまで黒魔じやないセ！この前のアストでヤニと丸が貰ひ

「それって今までの écriture」とかよ……」

あたしなんて英語で？を全問正解したのよ！！

いや あそこ超簡単な基礎的な詰入れるだけが至

コイツらは、本当に卒業できるのか？越後とか赤点を何回採つてゐるんだよ？

「そういえば、何で京介つて頭いいの？」

「確かに。俺が知っている限りじゃ、野球部で1番だつたばっただけで、真面目に授業を受けてるからだ！寝てないでノートに書け。そしたらできるから」

ヤナ 面倒くさい

「何でここだし」

一席に着け、ホームルーム始めるぞ！」

担任の大河内先生が来て談話は終了した。

「教科担任にテストを返すよ」って言われるから返すぞ！」

梨子勝負だせ！！

「あたしに勝てると思ってなの?」

越後と梨子は何か争つてるしよ……。ついついものも面倒くさいな。

「黒崎。次も頑張れよ」

「はいよつと」

先生から受け取った数学の点数は86点。俺の得意教科なので高い点数を採れる。

「あたしの勝ちねつ！」

「ちくしょう……、いけれえ間違えなければーー！」

越後と梨子のテストに田をやる。机の上に置きっぱなしの丸見えだ。

石川梨子 19点

越後竜太朗 15点

「お前ら勉強しろ」

まず、ついついみたかった。なんかいい勝負してるかな?と思つたらどいつも赤点じゃないかよ!

「石川！越後！高科！お前らは赤点だから補習だぞ」

「ええっー！」

このメンバーはいつもの赤点組だ。梨子とはたまに勉強会をして赤点を回避することがあるのだが、今回は勉強会をしてないんだよな。

「1学期期末考査のテストの結果は廊下の掲示板にでているので田

を通すよ。以上！」

休み時間になるとクラスメートはテストを見せ合つたり、自分の順位を確かめに行つたりしてくる。

「黒崎君。テストの結果を見に行きませんか？」

「桜空か。いいけど、お前のお姉さんはなんとかならないのか？」

芳櫻桜空。中学校から知り合いになつた女子だ。照れ屋さんで出会つた頃は大変だったもんだ。それでそのお姉さんが……、

「京介君！ついにやりましたよーー！」

「何がだ？」

「ふつふつふつ。なんとーー！梨子ちゃんとのを抜きましたよーー！」

そう言つて俺に見せてきたのは、

高科奈桜 21点

あつ。うつてこつのは越後のことだから。

「お姉ちゃん！勉強しないと留年しちゃうよーー！」

「確かに越後や梨子はたまに赤点を回避してるけど、高科は毎回だからな」

「ソレハソノトキカンガエマスヨー！」

「棒読みじやないかよ」

高科奈桜。桜空の姉で妹と全く正反対の性格をしていて、その姿は梨子を錯覚させる。名字が違うのはまた別の機会に説明するよ。

「私は53位ですか？……。」「

「あたしは12位ですよーーー。」「

「…………下からだろ」「

「黒崎君は…………24位ですかーーすゞーーいです、

1クラス40人で4クラス160人だ。下から12位となると…………、

「149位はさすがにマズいだろうが」「

「お姉ちゃん…………」「

「そんな目で見ないでくださいよーーー。」「

今日の昼休みも平和だった（笑）。

部活の時間になる。車坂という鬼コーチが今日来る。先日まで誰かに会いに行っていたらしい。だから、今日の部活はキツくなるな。

「京介、新しいバットの色は何にした？」

「黒だよ。やっぱりどんな色よりも黒が落ち着くからな」

「京介らしいね。なあ、俺らが最初に公園で会った時のこと覚えてる？」「

「ああ、もちろんだ」

（約10年前）

「ポジションはどこなんだ？」

「うーん。ピッチャーがいいな」

「そこはダメだ。俺がエースで4番だからな」

「ええっー！僕だってエースで4番がいい！」

「なら、どっちかがエース、どっちかが4番に分けないか？」

「じゃあ、僕はエースにしようかな」

「なら俺は4番だ。俺がキャッチャーになれば俺らはバッテリーってことだな？」

「黒崎君はキャッチャーをやるの？」

「エースと4番がバッテリーってカッコいいじゃんかよ？」

（現在）

「地味に恥ずかしい」と言ったな俺

幼い日の思い出である。優輝とは近くの公園で知り合った。この頃は本当にエースで4番を目指していた。ただ他人に頼らず勝とうとしていたなんて馬鹿すぎて言えない。

「あの時、俺が4番を選んでいたひじつなつたんだろ?」

「そんなの、俺がエース、優輝が4番だろ」

「あはは、そのまんまだね。でも、そつちのほつが良かつたかも」

確かに今思えばピッチャーも悪くはないと感じている。

「馬鹿だな。こうこいつのはやつ直しが効かないんだよ

「…………そうだね」

昔話を終えて部室を出る。グラウンドの方を見ると、車坂コーチがいた。なぜか部員を集めて話をしているみたいだな?

「お願いしゃつす!」

「おい…………黒崎。話がある」

「なんすか?」

あからさまに怒っている(笑)まあ、原因はわかつてゐるナビ。

「2日連続で自主練つてこいつのはないんじゃないか?」

「まあ、聞いてぐださこよ」

で、事情説明した。無駄だと迷つがちょっと立抵抗しつづか。

「…………全く。東はなぜ、黒崎をキヤプテンにしたんだか」

「優輝でも良かつたんですけどねー」

「雨崎は皆の意見を聞いてまとめようとするんじゃないかな?」

「まあ、アソシの性格ならあり得なくもないな」

「のまま自主練のことを持たせられるかな?」

「黒崎、外周50周行つてこい」

「殺す気か！？」

外周はとても広いのできつとフルマラソンを余裕で越えてしまふだろうが！？

「時間がないから5周でいい。行つてこい」「はい！」

嫌々、走ることとなつた。一周に10分かかるので、練習に参加するには5時位かな？

「黒崎君。何やつてんの？」

「走つてんだよ。木村なら理由を言わなくともわかるだろ？」

「ええ、2日連続自主練なんてしてたらこれ位当然でしょう？」

木村汎花。野球部のマネージャーの一人で、ちょっと厳しいことを言つが真面目な人だ。

「ちつ、キャプテンつて面倒くさいな…………」

「何言つてんのよ。あなたは4番で雨崎君とバッテリー組んでプロのスカウトがきたほどなんでしょう？」

「キャプテンに大事なのはそんなんじゃねえよ

俺にはキャプテンになつたところでどうしたら皆が効率的な練習ができるとかは全くわからないのだ。

「とりあえず外周頑張ってね」

「後、3周とか怠いわ」

木村と別れ再び走りだす。走り終わっても地獄の練習（サボったのでいつも2倍）を死ぬ気でやりきった。後、夏休みまで1週間だから明日も頑張るかな……。

1回表 親切（後書き）

京介「俺つて13主設定なのか？」

作者「ルックスだけね。性格は少しシンデレラっぽくなつたけど」

千羽矢「たしか、13主つてパワポケ史上最高のイケメンだよね？」
優輝「うん。実際ポケ体だから」「動とかで一次創作見たほうが多い」と思「うよ」

作者「つーか、シンデレを否定しなんだな」

京介「いや、シンデレじやないし」

梨子「1話目からだけキラ説明多くない？」

作者「そりや、クラス40人全員がパワポケの主要キャラクターだった人たちだからな」

京介「マジかよ……」

竜太朗「なんで俺の紹介が省略されてんだあーーー？」

作者「パワポケ知ってる人ならわかるだろ」

竜太朗「つまり、俺は有名人つてことかよーーーさすがだな俺ーーー」

汎花「馬鹿ね……」

1回裏 天才（前書き）

裏物語。

黒崎京介が表の主役。

黒崎京介以外の人が裏の主役。

と言ったかんじで話を進めていきます。

今回は雨崎千羽矢視点です。

1回裏 天才

「私には心に決めた人がいるの……」

「……………そうか」

本当にしつこい。この先輩に何回告られてるんだろう?だから私は男子が絶対に諦めてくれそうな告白の返事をした。

「その心に決めた人ってのは誰なんだ!?俺、そいつに近付けるよう頑張るからよ……！」

「…………」

私は答えが出せなかつた。「心に決めた人がいるの……」なんて、言葉のあやだつたから。

「(めんなさい)…………」

そう言つて逃げるよう立ち去つた。帰る道の途中、私はため息しか出なかつた。……実は答えを知つてゐるんだもの。

「はあ…………」

答えはお二イと京介君。私にとつてはお二イは家族として本当に好き。私を大切してくれ立派なお兄ちゃんだ。たまに頼りないけど。

「京介君は…………」

そう。問題は京介君。彼は幼なじみで、私達兄妹が喧嘩をしてれば、

いつも仲直りをさせてくれる。まるでもう一人のお兄ちゃんみたいな人だ。そして、野球を教えてくれたのも京介君だった。

「千羽矢！一緒に帰ろう！」

「あれ？おーイ！」

私のお兄ちゃんだ。タイミングがいいのか、悪いのか。

「どうしたんだ千羽矢？浮かない顔してるよ？」

「うーん、ちょっとね。問題の答えが出なくて」

「千羽矢が解けない問題なんてあつたんだ！？」

「そりやね」

私はおーイにせつきの告白から今なんで悩んでいるか話した。すると思案顔でおーイが、

「心に決めた人って誰なんだ？」

なんて聞いてきたよ……。おーイは私の愛する人に興味津々みたいだ。

「それで迷ってるの！」

「あんな先輩とかは俺が認めないからな！」

「なんで、おーイが決め付けるのさ！？」

「…………」

この時、おーイはなんて言いたかたか私にはわかる。それは私達家族しか知らない秘密。

「フン！」

それに気付かないふりをしてその場を駆け足で去った。その後は顔も合わせず、一日を終えた。

いつもより早い時間に私は起きた。登校はおーイか友達と行くけれど今日は違う。そのためには早く出かけないといけない。

「行つて来まーす」

誰もいないリビングに言った。もちろん返事はない。外を見ればまだ太陽が昇ったばかりだった。私はその人の家に行って一緒に登校しようと思った。

ピンポーン、と呼び鈴がなる。

「どうやら様？」

「私だよ、千羽矢だよ」

ドアが開く。そこにいたのは黒崎京介君。ルックスは先輩の雪白さん？といい勝負をする位いいし、性格だってマイペースで怠そうに行動してるけれど、内心はちゃんと他の人のことも考えてくれている。……それに頭がいいときたもんだから完璧超人なのよね。

「チハか?どうした?」

「一緒に学校行こうよつー!」

「いいけど、珍しいな?チハが俺の家に来るなんて」「たまには京介君と話しながら学校行きたいなって思つただけだよ?」

そんな完璧超人と黒崎京介君にも苦手なことがあるみたい。

まず美術がまるでダメで、京介君が唯一出来ない教科みたい。本当に絵心がないの。そして恋愛に関しての知識は全くと言つていいほどないと思う。女の子と付き合つたこともなく、そういう話に関わったことがないなんて、今時珍しい高校生だね。

「何だ?話でもあるのか?」

「まあね~。おーイともめちゃつたからねえ~」

「放つておくれのもどうかと思うから話を聞かせてくれないか?」

京介君は……また私達に気を利かせている。嬉しいな。京介君にも先輩の告白のことを話した。すると京介君はおーイともめてる理由を当ててしまつた。凄い勘?だなあ。

「京介君にはいないの?好きな女の子」

「考えたこともなかつたな」

即答。いくらなんでも早すぎるのでー。

「むー、勿体ないよ。京介君カツコいいのに

「そりや、ありがとよ」

軽く流されてしまった。今の言葉は紛れもない私の本心だ。きっと京介君は冗談で言つてると思われてるんだ。

「本心なのに……」

呴いてしまう。京介君を好きな女の子はいつもいふと思ひ。ま、きっと鈍いから気付かないけど。

「チハにはいるんだろ? 心に決めた人が」「それは言葉のあやつてやつだよ」

京介君と田が合つてしまつたけど、その純粋な田は考えを見透かされそうだった。つい田をそらしてしまつちゃつた。

「… う! ?」

「どうしたの? 京介君?」

突然、京介君が「やつてしまつた」みたいな顔をしているので声をかける。

「俺の本能が『早くここから逃げろ』って指示してるんだ」

「……何それ?」

「チハ、悪い! 先に行く! …」

「えつ? あ、うん」

京介君は走りだした。その後、私の横を誰かが通り過ぎた。そしてその人は京介君の肩を掴み言い争っていた。京介君の幼なじみの梨子さんだ。京介君曰く「天下のトラブルメーカー」らしい。梨子さんは、あまり話したことはない。京介君と梨子さんは幼稚園からの幼なじみ、私達は近所での幼なじみなので話す機会がないの。

しづめりへかると梨子さんと京介君を引つ張るよつて走りだした。

「お似合」のカップルだと思うんだけどなー」

妬こちやうなあー。でも京介君と梨子さんつてどうかといふと…

……、

「バカッフル……なのかな?」

私は苦笑した。

「雨崎くんー!さすがだ!次のテストもこの調子で頑張りたまえ!」

「はいはーい、本村先生」

数学のテストが返ってきた。その点数は100点。数学は公式を覚えてれば楽だったので勉強は少しだけで済んだ。

「千羽矢さんは100点ですか?凄いです!—」

「若葉は何点だったの?」

深草若葉。神桜中出身の1年生ながらも生徒会書記を頑張っている子だ。男子と話している時にまだ慣れてなくて小動物みたいな感じ

がほんつーとに可愛いのよーー。

「お恥ずかしながら…………」

「96点でも凄いって……ほらほら胸張ってーー！」

「千羽矢さんつー？胸張つてなんてそんな大声で…………！」

「若葉のサイズなら世間でも充分通用するよ？」

「わっ！わっ！千羽矢さんーー！」

慌てる若葉も可愛いなあー…………。

「テストの結果は廊下の掲示板に載つてるから確認するよ！」。はい！ホームルーム終わりー！」

本村先生のホームルームが終わると皆で廊下の掲示板に移動した。

「千羽矢ー！結果見に行こつよー」

「しおぶ、どうしたの？やけに自信満々だけど？」

室町しおぶ。同級生で少しあつちよこちよいでの、バイト頑張つてる真面目な子だ。

「今回は全テストの平均を越えたんだよーー！」

「しおぶ頑張ったねー」

何かとケアレスミスが多いしおぶなので今回は凄く頑張ったと思うよ。慌てすぎて解答欄がずれたり、新しい漢字を作つたりしてたなあ。

「しおぶさん、私もーー一緒にみるしこですか？」

「うんー行こうよー」

廊下の掲示板には、

1位 雨崎千羽矢
2位 深草若葉

とあつた。

「さすが天才少女雨崎さんだな～」

「深草さんも凄いなあ」

と、私達を褒める声がちらほら聞こえて若葉は少し恥ずかしそうだった。

「やつぱり凄いなあ～千羽矢と若葉は」

「お褒めいただき光栄です」

「しのぶは……59位だね！～前回よりも20位ほど上がったよ

！～」

「やつたーっ！」

私も京介君と梨子さんみたいな仲の人はいないけど、こんなにワイワイできるのは若葉やしのぶのおかげだね！～

「千羽矢さん、楽しそうですね？」

「う～ん？ そう見える？」

「はい。今朝は少し思い詰めた表情でしたが

「そついえば千羽矢。朝に黒崎先輩と一緒に黙ってたよね？」

「見られていたなんて。でも恥ずかしい」とじやないから大丈

夫だ私！

「黒崎先輩と何かあつたの？」

「何もないよ。授業始まるから席戻るつ？」

「そうですね」

若葉は席に戻つて次の授業の英語を準備をしている。

「千羽矢！ 悩んでいるなら相談してね？」

「ありがと……しのぶ」

しのぶも自分の席に戻つて数学の準備をしている。……次は英語なのに。アハハ、おっちょこちよいだな……。

「今日の車坂コーチは機嫌がいい」と何人かに話したけれど信じてもらえなかつた。たしかに、2日連続自主練なんとしてればコーチも怒る。でも、京介君に外周5周は何となく甘いなあと思った。

「チハちゃん、お疲れ様」

「玲奈さん、お疲れ様です」

霧島玲奈さん。京介君と同じクラスで野球部のマネージャーさん。小動物みたいな若葉の可愛さと違つて、玲奈さんは美人でスタイル

がいい。……私も少し色気が欲しいな。

「あれ？ 黒崎君は？」

「京介君なら外周走つてます。外周5周なので5時位に戻つてくる
と思います」

「……大変だね」

外周5周つて他の野球部なら何となくマシに聞こえるけど、親切高校は本当に長いの！！

「玲奈さんは京介君のこと気に掛けてますか？」

「えっ！？ いや、そういうわけじゃ……」

反応が怪しいなあ。やっぱ京介君は人気者なんだらうね。

「ライバル多いですよ」

「私は狙つてないから大丈夫よ。チハちゃんはどうなの？」

「私は……今の関係で満足です」

京介君、おーい、私の3人でいられるのでいいのかかもしれない。京介君もそういう望んでいるんじゃないかな？

「それと……京介君は鈍感ですか？」

「確かに。石川さんや芳槻さんがアタックしてゐるのに全く気付かないもんね」

「芳槻さん？」

その人の名前は初耳だった。でも京介君にアタックしようとしている私の同学年の人もいるから珍しくないのかな？

「京介君が名前で呼ぶ数少ない人だからね。仲いいんじゃないかな？」

「京介君が名前で呼ぶってかなり珍しい。知ってる中で梨子さん、芳櫻さん、京介君の妹、私？位で、名字で呼ぶタイプだと思つていたのに……。幼なじみ以外でも名前で呼ぶ人がいたんだ。

「芳櫻さんは中学生の頃に何かあつたんだと思う。それを境に明るい性格になつてたからね」

「それまで暗かつたつてことですか？」

「うん。他人を拒絶しちやつてたけど……京介君が助けてくれたんじやないかな」

「それなら京介君に惚れてもおかしくはない。お人好しなんだろうね」
……京介君。

1回裏 天才（後書き）

玲奈「裏物語で出されてもね…………」

作者「そのうち、表で出てくるから大丈夫だつて」

千羽矢「若葉としのぶが同級生つて凄い発想だよね」

若葉「神桜中つて何なんでしょう?」

作者「そこはネタバレだから言えないな」

京介「何か…………余つたキャラを適当に突っ込んでないか?」

若葉&しのぶ「…………」

作者「…………仕方なくね?クラス40人以上にしたら酷いことになん
だろ?準レギュラー枠なんだからよ」

京介「あの3人はまず出さないでくれよ…………」

作者「俺だつて出したくないさ…………」

2回表 義妹（前書き）

今日は黒崎京介の妹の登場です。タイトルでわかると思いますが……。

余談ですが彼女候補の皆を出せるよう頑張って行きます。

2回表 義妹

俺は一人っ子で家族は外国で暮らしているから、本来、家には誰にもいない。

「ただいま～」

「お帰りなさいです。お兄ちゃん！」

が、妹がいる。さつき一人っ子って言つたが、別に隠し子とか血が繋がつていないとかではなく、形だけの兄妹である。

「昨日泊まつた人にちゃんとお礼したか？」

「はいです！ とても楽しかつたです！」

別に俺がロリコンと言つわけでもない。かといって妹萌えとかでもない。

「じゃあ、飯作るからちょっと待つてくれ」

「その必要はないですよーアカネが作つておきましたーー！」

昔話は好きじゃないけど大事なことだから話しておぐ。俺の義妹、高坂茜とその出会いについて。

2年前

「優輝、俺は夕食を買つて帰るからよ」

「あつ、そつか。京介は一人暮らしだもんね。また明日」

「おう、じゃあな」

中3の俺、黒崎京介は親が外国暮らしのため家事は自分で全てやっている。両親から生活費を貰っているが、少し多めなので豪華な食事でも作ろうか……。

「卵がねえんだよな……」

近くのスーパーに近道のために公園を通る。すると、少し草むらに隠れているけど何か……カラフルっぽい色が見えた。

「何だ？」

好奇心が湧いたので調べに行く。それが見える直前。ピンクのパークを着ていて小学生位の子が倒れていた。

「おい！大丈夫か！？」

「あ……う……」

意識はある。おでこを触ると体温計がなくともわかる。39℃は越えてるかもしねー！

「今、救急車呼ぶからなー！」

「え……ゅ……」

「もしもしー救急ですー！外で女の子が倒れてー！意識はあるけど、凄い熱ですー場所は小波公園ですー！」

その日の俺はもしかしたら生きてて1番動搖していたかもしない。救急車が着いて少女と一緒に救急車に付き添うことになった。病院に

着いて少女は運ばれていった。保護者とも連絡が取れないので、少女と会話ができるまで待つ。

「ん？あれ…………？」

「目、覚めたか？」

少女の目が覚める。今時間は19時。ずいぶんと遅くなつたけど、公園で行き倒れになつていた少女を救えてよかつたと思つ。

「あの…………あなたは？」

「俺は黒崎京介。親切中3年だ。公園で倒れてたから救急車呼んだんだ」

「ありがとうございます…………」

少女は体を起しかうとするがまたベッドに倒れてしまつ。

「おい、無理すんなつて。ゆっくり休めよ

「すみません」

「どうあえず、2日3日は安静にしてろよ。学校に連絡入れとくか

らね

少女は申し訳なさそうに頭を下げる。

「名前と学校を教えてくれないか？知らない人に個人情報を教えるのがダメなら親の連絡先を頼む」

「名前は高坂茜です。親切中の1年生です」

少女の名前は高坂茜。まあ、聞きたいことはいろいろある。なぜ公園で倒れていたのか？まずこれが一番の疑問だ。その前に……、

「中学生だつたんだ！？」

「むう～、失礼ですね。身長はまだ成長してませんが、他のところは急速に成長します！！」

女の子としてどうかと思う発言をしているがスルーで。

「何で公園で倒れていたんだ？人から見えないあんな林の中で？」
「華麗にスルーされました、悲しいです。そこで暮らしているからです」

.....?

「もう1回、何て言つたんだ？」

「？あの公園に家を建てて住んでいるのですよ」

「はああああ！？」

ちょっと待て！？公園に家を建てて住むってー？はあああー？ええええー！？

「黒崎さん？病院では静かに、ですよ？」
「はつ！？ああ、悪い」

落ち着こうつ俺。せつと[冗談だらう]。せつだ、そつに違いない。

「黒崎さんにお願いがあるんですけど……」

「何だ？」

病人のお願いだから聞いてあげないとな。

「アカネの家族になつてくれませんか！？」

「看護師さん！？倒れた時に頭を打つたらしいから至急、脳外科へ搬送してください！！」

「頭は正常ですよ！？」

おかしい。梨子と話している以上に取り乱すなんてこの高坂茜は何者なんだ！？

「新手のプロポーズか！？結婚詐欺ならお断わりだ！！」

「贅沢は言いません！妹でお願いします！」

「ますます意味がわからんねえよ！？」

とても正氣の沙汰とは思えない…………。

「むう～、全力で拒否されました。何がいけないんでしょ？」「

「お前の言動だ！つーか、俺はまだ中3だからな？知らない中学生にそんなこと言つのは危ないぞ？」

俺は小学生の時から女子と付き合つことに興味をなくした。だから、中1の女子と兄妹の契りをかわすつもりはない。

「黒崎さんはいい人です！」

「倒れていた女の子を救つたからっていい人とは限らない

「アカネが倒れてから何時間かしますが、ずっと付き添ってくれるなんていい人以外の何者でもありません！！」

「う……それはだな」

返す言葉がない。3時間も待つてるのは勿論、心配だし何より保護者が一番心配してゐるだろう。

「それより、親への連絡はいいのか？」

「…………」

高坂は急に押し黙つた。先ほどの明るい様子から一変している。もしかしたら俺は地雷を踏んだかも知れない。

「『めん。関係ない俺が聞いたらいいことだつたな

「いえ……大丈夫です」

親が……いないのか？公園に住んでるのも親がいなくて家もないからホームレス生活なら、退院した後どうするんだろうか？

「……退院したら俺の家で暮らさないか？」

「…………えつ？」

「退院した直後にまた公園で暮らしてたら危ないからな

「…………えつ？ええつ！？」

さつきとは違い、元気に驚いている高坂。梨子と同じでコイツには元気が似合つよ。

「答えるのが嫌なら言わなくていいが、質問がある

「何ですか！？アカネのことですか！？」

「お前の親だ。俺の家で暮らす前にお前の親と連絡がとれて、そつ

ちで暮らせるならそうするんだ

「……連絡はとれません」

…………その時に感じたのは悲しみじゃなくて恐怖だった。親がいな
いじやなく、家庭内暴力を受けているのかもしれない。

「わかった。退院したら俺に連絡をくれ。迎えに来るから」
「ありがとうございます。お兄ちゃん！！」

「待て、さらっとお兄ちゃんって呼ぶな」

「高い壁に阻まれました……。でもいつか亀裂が入る日が来ます

！――」

「本人の前で言つなんよ」

今まで1人暮らしで静かだつた俺の家がにぎやかになるな、と思つ
た。

「お大事にじゅうぞー」

「ありがとうございました」

隣には高坂。俺の家に來るのが楽しみで一睡もしてないらしい。
……病人が何やってんだよ。

「ついにお兄ちゃんのお家へレッツゴーです！…」

「別に何も変わっていることはないぞ。一人暮らしだつたがお前に
も何か手伝つてもらう」

「はい！…任せください！…」

「これで洗濯やら掃除やらを一人でやらなくて済むな。まあ、食費は
増えるけれども。

「高坂は洗濯機使えるか？公園暮らしなら洗濯機はなかつたんじゃ
ないか？」

「話を遮るよ！ですみません。……何で名字で呼ぶんですか！？」

「お兄ちゃんなのに…！」

「必死にスルーしてたのに……。何でつっこまないといけないんだ
！？」

「俺だつて兄弟とか欲しいなーとか思つてたけど、俺らは赤の他人
だからだ！」

「これがお兄ちゃんの家ですかー？ドキドキしますー！」

「話聞けよおおーーー！」

ダメだ。高坂と話していると梨子以上に取り乱してしまつ。こんな
破茶目茶な奴は初めてだ！

「アカネ、ここが俺の家だ」

「ついに兄妹の契りをかわしてくれましたー！」

「違う！…」

取り敢えずアカネを中心に入れる。俺の家は個室が2部屋あつて、片
方は使つてないからほこりまみれだ。

「アカネの部屋をここにする。汚いけど掃除をすれば公園よりかはマシになる」

「ここに掃除は任せてくれ……」

「いや？ 手伝うが……」

「今からお世話になるの」手伝つてもうつなんてとんでもあります

ん……」

アカネは眞面目な顔でこっちを見てきた。兄妹の話で騒いでいて気付かなかつたけどしつかりした子だと思つ。

「じゃあ、部屋の掃除が終わつたらアカネの日用品とか買いに行くか？」

「ありがとうござります！」

アカネが掃除している間に父さんと母さんに連絡入れようかな……。携帯を取り出し母さんに電話をかける。

「もしもし？ 京介？ 久しぶりねー」

「母さん？ あのさ、報告があるんだけど」

「結婚！？」

「違つて……」

皆、早とちつしすゞだらつ……つむのむに疲れてきたじやんかよ

！！

「俺の家にもう一人住むことになつたけど、別にいいよな？」

「うんうん、全然大丈夫よ～。付き合つてるの？」

「妹だ」

「そなへ～。わかつた。困つたら母さんに相談してね」

……え、ちょっとは、

「つづこめよおおおーー！」

「ちょっと京介！耳が痛くなつたじゃない！？」

「妹につづこめー俺は一人っ子つて知つてるだろーー！」

黒崎沙耶。俺の母さんだ。説明しなくてもわかる通りに天然で、会話が成立しないのが特徴だ。

「母さんだつて一人っ子よ？知つてるわよ」

「母さんが一人っ子は関係ないだろーー父さんにも言つてくれ。じやあな」

「え？お父さーーー！」

電話をきつた。しばらくは電源を消して繋がらなくしているか。母さんの話はたまにループするから強引にでもきらないと。

「お兄ちゃんー終わりましたーー！」

「よし、じよ苦労様。じゃあ買い物に行くか？」

「最後にいいですか？アカネの家を回収したいのですけど…………」

家を回収？何を言つてるんだ？

「いいけどよ？持ち運べるものなのか？」

「段ボールですから、少女でも持ち運べますーー！」

「段ボールウゥーー！」

一人じゃつづこみきれないだとーーー？」

「今、持つてきますね」

「お…おう」

とんでもない奴が俺の家に来たな…………。できれば梨子とか高科には秘密にじとかないとばれてしまうからな…………。

「ただいまですー!」これがアカネハウス2号ですー!ー!

「コレ、イエジヤナーイ!ダンボール!」

そこにあつたのはベンキでカラフルな色に塗られたダンボールに、窓までついていてメルヘンっぽい家(笑)だった。

「1号は台風で吹っ飛ばされました!」

「よく生きていけるな!? 風呂はどうするんだ?」

「水泳部のシャワーを使ってます」

「トイレは?」

「公園にありますので」

「洗濯は?」

「溜めてコインランドリーです」

「金は?」

「前にアカネハウスの中に生活費と書かれたお金が置いてあったのでそれを少しずつ使ってます」

「…………誰だよ? そんなことをしたのは?」

「たしかRiNって書かれてましたよ」

「リンさんかよ!?」

「知り合いでですか!?」

リンさん。色々不明。梨子と一緒にいた時に突然現れた女人。金色で少し怖いイメージがあつたけど、優しい人だった。最近は全然会つてないけれど何があつたのかな?

「知り合いだけど、謎が多い人でどこにいるかわからないんだよ」「お礼がしたいです……」

「まあ、スーパーに行こうか？女子が必要な生活用品は俺にはわからぬいからな」「はいです！」

それから約1ヶ月。アカネは三者面談の話を俺にしてきた。

「夢だつたんです！三者面談を3人でするのが！！」

「三者面談にも親は来ないのか？まあ、俺も親が外国だからいつも2人だつたけど」

俺は兄としての保護者扱いされてるらしい。アカネの担任が「兄でもいいから三者面談をします」と言つてしまつたおかげで、アカネと俺は同じ中学校だから、物凄くシユールな三者面談になつた。
…アカネの担任の田中先生は俺の元担任だから、気まずくないか？

「では、中学校に行きましょう！…」「部活で行つたからもう2回目だ」

アカネとの三者面談と言つてもまだ入学して間もないから、特に話

すこともないだろ？と思つていた。

「おーい、アカネ行くぞ？」

「制服に着替えるのが面倒です。休日なのに……」

「夢の三者面談をするんじやないのか？」

「そうでした！……」

アカネと暮らしていてわかつたのは、女子は出かけるのに準備がかかることがだった。俺は持ち物をバッグに入れるだけだったが、アカネは髪を整えたり、服はどうちがいいか悩んだりしていた。……頭のアホ毛はいつもどおりだが。

「お待たせいたしました！」

「行くかあ。アカネ、成績表持ったか？」

「勿論です！」

アカネの成績はどうなんだろうか？少なくとも梨子よりはマシであつてほしい。もしかしたら逆にチハ並に頭が良かつたりしてな。

「アカネ、成績表見せてくれないか？」

「はいです！」

アカネの成績表に目を通す。

音楽	英語	理科	地理	数学	国語
5	5	5	5	5	5

美術 5

保健体育 4

家庭科 5

「アカネ……お前つて滅茶苦茶頭いいじゃん！！」

「そこまで讃められると照れますよ」

中1の俺より凄いな！？」1ヶ用は暮らしていく勉強していないのに……。天才ってやつだらうか？

「最近のテストは何位だった？点数も教えてくれ」

「1位でした。500満点中498点です」

紛れもない天才がすぐ近くに！？本当にチハ並だなー！

「まあ……先生も二者面談したくなるよな……」

現在

結局はアカネの親と連絡がとれないままだった。それと1回、優輝が家に遊びに来たので皆にはばれている。弁明はしたが梨子には心配そうな顔で「口リコンなの？」って聞かれたのが、ダメージがかかった。

「そういえば海に行くけど、アカネも来るか？」

「はいです！アカネは海が大好きですので！！」

アカネも中学3年生だ。けれどもずっと面倒は見れることはない。俺が高3になれば就活とかで遠いところに行くかもしれないから。

「このハンバーグ美味しいな」

「アカネの1からの手作りです。美味しいと言つてもらえて嬉しいです！！」

2年前とは違つて、俺の家は義妹によつてにぎやかとなつた。

……アカネハウス2号は今でもアカネの部屋のどこかに置いてあるらしい。

2回表 義妹（後書き）

京介「俺とアカネの話か」

作者「まあ、一応設定とかあるからね」

アカネ「リンさんはどうするんですか？」

作者「彼女候補じゃないが出すよ」

京介「アカネの親の話は？」

作者「出すとシリアスすぎるかもしないんだよ。だから保留」

アカネ「そういうえばヘルガさんも出すんですか？」

作者「出したら修羅場は確定だな。裏しか出でない人だけど頑張るかな」

京介「母さんってオリキヤラ？パワポケ10とかの両親かと思つてた」

作者「オリキヤラだ」

沙耶「私って出るのかしら？」

作者「俺の気分だ」

沙耶「そつなんですか？」

2回裏 噫茶（前書き）

全ての彼女候補を出す予定を少し変更します。

まず、彼女候補じゃなくて本名が出た人も出します（深草若葉や武内ミーナなど）。

男性キャラクターも出来る限り出しますが、無理がある人は出ないかもしません（レッドや渦木さんも厳しいかも）。

今回は芳櫻桜空視点。

2回裏 喫茶

「桜空！ もうやめなさいよ～」

「お姉ちゃん！ 数学の点数を上げないとー。」

「……私も面倒くわー」

「維織さんも！ ……」

私達は喫茶店でお勉強をしています。今回のテストでお姉ちゃんが赤点。維織さんは勉強を面倒くさがって50前後だったのに勉強会を開いた…………のはいいんですけど、

「准～パフェちょうだい」

「奈桜！ さつきも頼んだでしょ！ 終わるまでお預けだよ」

「そんなん～」

お姉ちゃんと維織さんは勉強をしないから正直、お手上げです……。准さんはここの中学校でバイトをしています。准さんの数学のテストは78点でした。

「…………赤点を取らなきゃいい」

「そうですよ。だから准～モンブランくださいな」

「お姉ちゃんは赤点でしょ！ ！？」

「赤点だとバイトも出来ないんだからね？ ！」

夏目准さんと野崎維織さん。中学校で知り合つてから私達はだいたい4人で行動している。准さんは可愛いものが大好きだけど、たまに黒い？女の子。維織さんはやる気ないが代名詞の女の子。

「…………桜空に馬鹿にされた気がする」

「…………奇遇ですね。私も何か…………」

そして、私のお姉ちゃんの高科奈桜。スクープ大好きで何かとトラブルを起こす女の子。名字が違うのは…………いろいろあったという事です。

「奈桜。」そのままだと本当に留年しちゃうつよ~。

「…………桜空のほうが学年が上」

「それは嫌ですね~。でも効率的に勉強したりざりやんてやるんでしよう?」

効率的に勉強をやるのなら、授業中にノートを取つて家で勉強するのが一番ですけど…………、

「カணニングの練習?」

「…………まず勉強じゃない」

「一夜漬け?」

「お姉ちゃん、途中で飽きて寝ちゃつたよね?」

「解答用紙のすり替え?」

「勉強じゃないし、人として最悪の行為だよ。そもそも誰とすり替えるの?」

「…………京介君?」

「ダメだよー! そしたら黒崎君がかわいそうだよーーー。」

お姉ちゃんつたり…………。

「桜空ってわかりやすいね~。京介君の」と云なるとすぐ慌てるからね~

「つー?」

「黒崎君は人気あるから、桜空も負けなにように頑張つて

「私は……」

「……好きなんでしょう？ 黒崎君の」と

お姉ちゃんも、准さんがクスクス笑つてからかつてる……確かに好きだけれど……。

「黒崎君には梨子さんが……」

黒崎君と梨子さんは本当に仲が良い。幼なじみで黒崎君も一緒にいると楽しそうだつたから……。

「恋に遠慮はいらないわよ！ 確かに梨子は黒崎君と仲が良いけど、桜空だつて負けてないからね」

「准さん！ 周りの密が見れますよ～！～！」

「うわあ……恥ずかしいなあ。世間に聞かれちやつたよ。

「夏田！ お前、バイトだろ？ そんなことつねんをくしてていいのか？」

「あれつ？ 黒崎君いたの？」

黒崎君ーへ～びびびつしょつー！ 今の聞かれてたら顔も合せられなによ……

「優輝と入つて來ただろうが。案内してくれたのは別の人だつたけど」

「………… 桜空？」

「わー？ ひや い！？」

「………… 落ち着けよ。お前が1番声でかいぞ」

聞かれてはいないみたいだけど、黒崎君が田の前にー？ 期待して准

さんとか黒い笑いをしてるよー。

「… わつきの話は聞こえましたか？」

「いや? 何か黒崎君つて聞こえたからこっち来た」

良かつた……。聞こえてたらダッシュでこの喫茶店から逃げようと思いましたよ……。

「まあまあ座つてよ京介君ー立ち話もなんでしょう?」

「でも優輝が……」

「あたしが呼んでくるから大丈夫だつてーー!」

「そつか?なら失礼しようつかな」

ええー? ここに座るのー? 私の隣なのにー?

「桜空。隣に座るがいいかな?ダメならそつちの2人席に座るからいいけど」

「い、いいえ! 大丈夫ですーーどうぞ隣にお座りくださいーー!」

言葉遣い変だよ……ー何やつてるんだりつ私ーーもつと黒崎君と仲良くならないとー

「…………私、ちょっとトイレー」

「えつ?」

維織さんが席を立っているのは私と黒崎君だけ。お姉ちゃん! 狙つてやつたのー?

「ん? 勉強してたのか?」

「はーはー。でも一向に進まなくて困つてるんです」

「高科が？」

「維織さんもですけど、2人ともやる気がなくて……」

そういうえば黒崎は頭がいいんだった。どうこう勉強方法が参考にしようかな。

「高科には物で釣つたほうがいいんじゃないか？」

「えつ？」

「アイツはネタが好きだから、それで釣るのもいいと思つやつ。」

その時に私が思いついたのは私にとつて……梨子さんも聞きたいことかもしれない。

「じゃあ、黒崎君のす……好きな人を……聞いてもいいですか！？」

言つてしまつた。返つてくる答えによれば私の初恋は終わっちゃう。

「俺の好きな人で高科を釣るのか？」

「だ……だつて皆が知りたがつて……いるから……」

「俺には好きな人はいない」

返事は曖昧なものだつた。きつといつ返つてくると思つていたけれど、ほつとしている。

「野球一筋だつたからな。恋とか全然わからないんだよ」

「それはですね……その人とずっと一緒にいたいなあって感じになる」とですよ」

恥ずかしいこと言つたなあ。でも！私の本音でもあるんです！中学の頃に私を救つてくれたのは黒崎君でしたから……。

「そんなこと言つたら俺は……優輝だつて、アカネだつて、梨子だつて、桜空だつて好きになるな」

「えつ？」

「クラスのやつらも同じでずっと一緒にいたい。そんな最高のメンバーの集まりだからかな」

黒崎君は笑つた。その純粹な笑顔は本当にかっこよかった。私達のクラスは良く問題を起こすことで知られているけど、黒崎君も自分から巻き込まれて楽しそうだった。私もお姉ちゃん、准さん、維織さんが好き。中学の頃には考えられなかつたことだから凄く嬉しい。

「私も……」

「京介！1人にしないでよ！」

「豆柴！いいところだつたのに」

雨崎君とお姉ちゃんがこつちに来る。今になつて「私も……」の後の言葉を言わなくて良かったと思つ。雨崎君のあだ名は豆柴だけど、理由は不明です。

「あれ？芳樹さん？」

「こんにちは。雨崎君」

「悪いな優輝。テストの話で盛り上がつてな」

「そりなんだ？でも俺と高科だけで何か気まずかつたじゃないか！」

「お、そりだ。桜空と高科は海行く？梨子に誘われてるんだ」

「海！？物凄く行きたいけれど……」

「『めんなさい』。夏は実家に帰らないと行けないので……」

「そりだ……じゃあ今日はそろそろ帰るな。アカネにも言つとかな

「こと

「じゃあね～京介君、豆柴」

「豆柴はやめてよ～！何か恥ずかしいじゃないか」

雨崎君と黒崎君は雑談をしながら店を出ていった。その後、タイミングよく維織さんが戻ってきて、タイミングよく准さんが今日の仕事が終わったらしく、制服姿で戻ってきた。

「……もしかして黒崎君を呼んで座らせたのは、お姉ちゃん達の仕業ですか？」

「偶然だよ」「絶対嘘じやあつませんか！？」

お姉ちゃんだけだけど、顔が引きつっている…准さんは豆をそらして黒い笑みを浮かべてこるし、維織さんは…………こつも通りだつた。

「豆柴が予想以上に豆柴でした。ナオつか、一生の不覚です……」「マスター、パンで足止めすればよかつたかな？」

准さんのマスタードパンって言つたら…………

「あれはパンがマスタードにサンドされてこるので、どうやって作るんでしょう？」

「…………食べてみたい

「维織さん…？絶対に後悔しますよ…」

食べた皆が倒れた恐怖のマスタードパン。電視さんが何回か来て何回もマスターに沈んでいるので、もう見たくない。

「あれ？今日はキーボードは来てないね？」

「電視？アイツに毎回来られたらこいつちが保たないよ…………」

その直後に、店の入口の約100メートル位先から「ドドドドドド」「キイイイイイボオオオオオドオオオオオ！」という音が聞こえたらしい。准さんの耳は何を感じしたんだびつ？。

「あれ？電視さん？」

「我が神が僕の名前を呼んだ気がする…………」

電視炎斬さん。准さんの追っかけで我が神と呼んでいる変わった人。何かと発狂しているからクラスの皆は相変わらず白い目で見てている。

「…………准ならさつき家に帰った」

「そうですか！……ありがとうございます野崎さん…………」

電視さんは敬礼をして、キイイイイイボオオオオオドオオオオオと言つて店の人全員に「なんだあいつ？」みたいな目で見ていた。

「准～もう大丈夫だよ」

「…………いつかマスター、パンより凶悪なもの作つてやる」

「…………恐ろしい」

この喫茶店には准さん目当てで来てる人も少なくないみたい。ここは親切高校に近くて私のクラスの人達も何人も通つている。安くて品揃えも良いから黒崎君も利用している。

「准君。君のおかげで客も増えてね。これからも頑張つてくれるかい？」

「はい！世納店長……」

世納店長。こここの喫茶店の店長で気前のいいダンディーな人。コーヒーに熱いこだわりを持つていて新作のコーヒーは欠かさずにチュークしている。

「世納さん。この間の新作コーヒー美味しかったです！」

「高科君、いつも飲んで感想を書いてくれてありがとうございます。早速新メニューにしようと思つてるんだ」

「絶対！流行りますよ……」

お姉ちゃんは世納さんと仲が良くて毎回、新作コーヒーが出た日はじっくり味見している。私もコーヒーは嫌いじゃないけれど、苦いのが少しダメなので砂糖やミルクがどうして多くなるので……。

「……私もお気に入り」「維織さんも気に入ってくれたかい？それはよかったです」

今日の喫茶店はいつも以上に騒がしかった。

「桜空ちゃん……」

「あれ、こつ考？」

桜井いつき。私達の幼なじみで、私達を追っかけるために親切高校に入学したみたい。

「姐御。ひどいですよー。せつかく同じ高校になつたんだから一緒に帰りましょうよー」

「あ、そういうばいつきって同じ高校だつたたねー！」

でもお姉ちゃんはなぜかいつきに冷たい。学年は一つ下だけれどよく私達の教室に遊びに来ている。なぜか黒崎君に敵対心を抱いているみたいで会うたびに殴り掛かるけど、受け流している。

「黒崎に会つてから姐御は冷たくなつた気がする…………」

「いつきは何で京介君が嫌いなの？」、「桜空ちゃんを惑わす悪魔だからですよー！」

「…………ちょっと今は」

「あたしも聞き捨てならなこと聞いたなー」

「え？ 姐御？ 桜空ちゃん？」

お姉ちゃんと目が合ひ。 「やめよー」と言つてこる田だつた。

「「いつきーあそこ」に使われてないビルがあるから行こうか（行きますか）？」？」

「ひつ！？ 笑顔が怖いですよーーー」のままじや、地獄を見ますー！

！」

地獄？ いつきは何を考えてるんでしょう？

「いつきー今から見るのは」

「地獄より酷いことよー」

「（ガクガクブルブル）」

いつもは静かだった廃墟のビルは誰かの叫び声で少しつるさかった。

2回裏 嘆茶（後書き）

維織「…………私も学生？」

作者「ああ、人気キャラはだいたい京介のクラスメートだ
准「作者さん？何か最初らへんに私を同級生にするのは無理とか言
つてなかつた？」

作者「それは京介が言つたんだ」

京介「はあ！？お前が喋らせたんだろ！？」

作者「まあ、正直俺は」のパワポケの世界觀を操れる超能力みたいなものだからな」

ホンフリー「（ノーピーしたい…………）」

京介「あれ？ホンフリーさん？」

ホンフリー「私達って同級生で出るんですか？」

作者「アホか。無理に決まつてんだろ」

准「ニアレイドとかビーフあるのさ？」

ニアレイド「まず姿が見えないので……」

作者「そこから先はネタバレだからダメーーー！」

幸太「店長といつよりマスターなんだが、訂正してくれないか？」

作者「気にしちゃダメ」

京介「つーか、ナンバーの方々は登場無理だろ」

ジナイダ「何！？」

京介「どっから出てきた！？」

ジナイダ「さっきからずっとといったのだが

エアレイド「喋らないといふかどうかわかりませんよ？私は小説だからいるのがわかりますが」

作者「番外編だから夢の共演してんな…………まあ、皆出すから安心してくれ」

3回表 神桜（前書き）

無理設定ありすぎ（笑）

つて感じで見てもうえると助かります。頑張れば全部のキャラクターだせるんじゃねー!? とか思つてたけどシズヤとかジンとかどうすればいいんだ!?

今回、黒崎の能力が発揮されます。

3回表 神桜

神桜高校。いわゆるお嬢様学校であり、親切高校と同様に、神桜小学校から神桜高校まであったのだが、ある高校に吸収され分校という形で存在している。もちろんだいたいの人は神桜分校へ行つたのだが、ある高校によつて行動を監視されるので、厳しい現状である。それを打開するために、他の高校に逃れる人もいるらしい。

「混黒高校？」

「うん。新しく出来たマンモス高校の頂点で、強くなつていらし
いよ」

優輝が俺に見せてきたのは混黒高校のパンフレットだった。マンモス高校なんて珍しいなーと思っていた。

「ん? これって……」

「京介! 今度見に行かないか?」

分校のリストを見ると、

海底分校
開拓分校
神桜分校

とあった。引っ掛けたのは神桜分校だった。親切高校と同じシステムだったので覚えている。そして神桜中を出身してきた人に知り合いがいた。

「混黒高校ね……」

「京介？」

「行かないほうがいいな。悪い噂も多いからな」

神桜のことについて聞きたいことがあるので聞くことにしよう。

「用事出来た。今日は昼休みにバスケできないや
突然どうしたの?まあ、用事なら仕方ないよな

優輝と別れて神桜中出身の人と話を聞くかな……。

「浅井!ちょっと話があるんだが」「あれ? 黒崎さん。ごめんね、桜華。先に行つてて」

浅井漣。いたつて普通の女子だ。コンピュータにやたらと詳しいことを除けば普通の人だよ。うん。

「あのさ、神桜について聞きたいんだけど……」「いいんですけど、長くなります」

「大丈夫だ」

神桜高校は俺と同じクラスの一ノ宮桜華のお父さんが理事長だったが、亡くなり混黒高校に吸収されたみたいだつた。一ノ宮は記者の武内さんと組んだり、ツナミで情報を探したりと忙しいらしい。目標は神桜の独立であり、そうすれば後輩が安心して神桜高校に入れるようになる。

「なるほどな……」

「私も頑張ってるんですが、桜華みたいにお金がないので……」

混黒高校の悪い噂は分校への悪質な行為もあつた。

「……俺もなんか手伝えることはないか?」

「えっ？ 黒崎さん！ いいんですか！？」

「俺もやれることをやってみる」

「ありがとうございます！」

浅井に手を握られる。「うつ…………何だか恥ずかしいな。

「おい……恥ずかしいんだが……」

「あっ、すみません。桜華に相談してきますね」

神桜中出身は浅井と一ノ宮以外に2人位いたような気がした。えーと、天月と南雲だったかな……。

「黒崎、話は聞かせてもらいましたわ。でも神桜出身じゃないかたがどうしてお手伝いをされるんです？」

「混黒高校は悪い噂があるんでな、そいつを確認するためだ」

部活に打ち込んでいる学校と言つのは素晴らしいと思つし、混黒高校は勉強も力を入れているみたいだ。……だけど、他の分校への悪質な行為は許せない。

「…………あなたが混黒高校の内部の人間である」とはありませんか？」

「それはないな。だつたら混黒高校をボコボコにしねえよ」

混黒高校に8対3で勝つて野球部の奴らは叱られてたな。まあ、睨まれたのは俺だけじゃなく優輝もだつたけど。

「確かに混黒は勝敗に厳しいですからね」

「それと裏切つたらこれを校長に提出してもいい」

そう言つて俺は内ポケットから一ノ宮に渡した。

「退学届……」

「一ノ宮が持つててくれ。いざとなつたら切り捨ててもいい。俺の覚悟は伝わつたか？」

「ええ。あなたなら信用できうりますわ」

一ノ宮と浅井は喜んでくれたが、もう一つ理由はあった。それは混黒高校にいるあの人のことだ。校長に苦しめられてるんだ。俺の尊敬している人を助けたい。

「…………ていうか浅井。海に行つていいのか？一ノ宮が忙しいとか言つてただろう？」

「夏休みは自由なので大丈夫ですよ。黒崎さんも海に行くんですね」

浅井は楽しそうにしているが、隣の一ノ宮は「むー」という感じの難しい顔をしている。

「一ノ宮。気分転換しないといいと考えつてのは浮かんでこないんだぜ？」

「もうだよ。桜華は思い詰めすぎだよ？」

一ノ宮と浅井と仲が良いみたいだけど一ノ宮が浅井のリズムに飲み込まれてるよう見える。

「私も海に行きたいのですが……」

「桜華も来る！？」

「交際していない殿方に肌を露出するのは抵抗があるんすわ！」

殿方つて……珍しい言い方するな。さすがお嬢様と言つたところかな？

「別にいいと思つのに……。それに海には一般人がいるから見られちゃうよ？」

「う…………確かにそうですね」

海に行くメンバーは俺、越後、優輝、チハ、梨子、アカネ、霧生、浅井の8人になつたんだけど、1泊2日。つまり泊まりということなので女子は少し抵抗があるかもしれない。メンバーがメンバーだから抵抗どころか夜中に枕を投げてきそうだ。

「他にも神桜出身はいなかつたか？」
「いますけど……」

お嬢様学校となれば親が大企業の人とかじゃないのかな?なら、スポンサー やら資金も確保できるんじゃないか?

「家庭事情で参加してないんです。すみませんが黒崎さんにはお教えできないんです」

「いや、大丈夫だ」

他の2人は家庭事情があるなら仕方ない。

「俺達3人で神桜を独立させよ!」

「おー!」

「お…おーですわ!」

昼休みは終了間際。解散となり放課後に武内さんを紹介してくれるようだ。

「部活があーー!?」

忘れてた!! そういえば部活あるんだった!! 「一チに無断欠席するとまた外周が…………!」

「ワタシは武内ミーナと申します。よろしく黒崎さん

「よひじぐ。武内さん」

少し小柄なお姉さんだった。俺の想像なら普通におばさんとかだと思つてたから意外だ。

「黒崎さんの覚悟は知つてます。しかし混黒高校は手段を選ばないです」

「えつ？ それって？」

「実力行使。直接危害を加えてくるつうことだろ？」

「はい。ワタシの仲間も危ないとこひるでした」

わかつていていたが、ここまで救いようがないのか？

「何をされたんだ？」

「車でひかれそうになつたそつです……。幸い軽症でしたが……」

「…………」「…………」

浅井と一ノ宮が驚いている。車でひくなんて行動は個人的な行動じやなく、上からの命令だらうな。

「今日は混黒高校に潜入しますが、黒崎さん。あなたはどうしますか？」

「勿論行くぞ。楽しそうだ」

これは思つた以上に楽しいことになりそうだ。修羅場をむかえそうだな。

「あのー? 楽しそうつて……ー! 命が懸かってるんだよー!」

「そうですわー!？」

「こと教えてやる。1回死にかけた人つてのは命を軽く見ちゃ

うんだよ。特に自分の命がな

昔、俺は1人で夜の道を歩いていたら銃撃戦に巻き込まれた。俺はその時に死んだと思った。突然俺を盾にして銃撃戦を続けた。その時に俺は泣くこともできなかつた。そして、ある人が俺を助けてくれたんだ。

「黒崎さん……」

「黒崎。無事に戻つて来なさい」

「わかつてるつて。少しさは俺を信用しな。あ、死んだら退学届出しひいて」

その助けてくれた人はホンフリーと名乗つた。俺の尊敬する人の1人なんだけど。その後も何回か会いに来てくれた。ホンフリーさんは俺が正常が調べに来たらしい。1人っ子の俺にとつてはまるでお姉さんのようだつた。…………実は男だと知つたら凄くびっくりした。超能力を見せてくれたけど、本物だつた。「ドウームチェンジ ダークスピア」と言つていたのは謎だつたが天井に立つてゐるなんてな。

「では黒崎さん。行きましょ」

「了解。浅井！コーチに『黒崎君は他校の偵察に行きました』って伝えて」

武内さんの車に乗り混黒高校に向かう。今からやることは命懸け（笑）だから注意しないとな。

「黒崎さん。あなたのことは一応調べておきました。変わつた能力をお持ちで」
「便利だぜ？」

小学生の頃に気付いた。俺には驚異的なバランス感覚があることに。一輪車や平均台は余裕だった。そのうちに他の人の体重の掛け方も地面に足をついてるだけでわかるようになった。

「しかし、黒崎さんも変わつてますね。引き受けた人は黒崎さんを入れて3人です」

「後、2人か」

きつとプロっぽい人が来るんだろうな。そう思つていた矢先、

「どうぞお乗りください」

「失礼しますよ」

「…………フン」

…………凄い氣まずい。プロっぽいというより暗殺者みたいなのがいるんだけど。1人は眼鏡かけて警察官みたいな人と、もう1人はワイルドな感じで青い服と青い帽子っぽいのを着た人。正直、隠密行動に向いてなさそう。

「ミーナさん。1人未成年がいますが…………」

「ワタシが直々スカウトに行きました。潜入に関していい能力を持つています」

「やっぱり最初から俺狙いかよ。素直に言つてもついてきたぞ？」

「おや？ばれてましたか」

話の流れで俺にスカウトしたのは確かにいいが、浅井や一ノ宮よりも俺を的確に絞つてスカウトしてるのはバレバレだ。

「こ」のガキが本当に役に立つのか？まあ、俺は金が貰えるならどーでもいいけどよ

「悪かつたなガキで。俺は黒崎京介だ」

「……フン。椿だ」

「私は渦木と申します」

外を見れば木が生い茂っている。そろそろ混黒高校かなーと考えていると隣の椿さんが武器を持ち始めた。

「いや、早すぎだろ」

「馬鹿か！ガキ！油断してれば一瞬で狩られるんだからなーーー」

「うつわー！怒鳴られちゃったよ。隠密行動を前にこれでいいのかよ？

「難所は見張りのロボットに赤外線の通路に迫り来る爆破型ロボット、3重ロックですね」

「見張りのロボットは俺に任せろ。ライフルで停止させる」

「おいー？そのライフルビーから出てきたー？まるでドラ もんのポケットみたいに出てきたぞー！？」

「では、椿さんが撃つたらあそこまで走り抜けましょー」

椿さんがライフルを持つその時の顔はさつきまでの顔とは違い、仕事人のようだった。

「ガンッ！…ブシュー……

とロボットの回路が壊れたことによるショートだらけ。これを狙つたなら椿さんは凄い人だと思つ。

「今のうちですー！」

「おひ……」

混黒高校の内部はやはり他の学校とは比べものにならないぐらい金を注ぎ込んでいた。

「赤外線の通路はどうしましょう?」

「黒崎さん。これを」

そういつて渡してきたのは赤外線ゴーグルだった。……まあ、言いたいことはわかるぞ? 渡れってことだよな?

「武内さん。下手したら失敗するかも」

「その時は退散しましょう。椿さんが車で待機してますので」

赤外線ゴーグルを被り見てみると、赤い線が入り乱れているのがわかる。これを道具なしで切り抜けるのは容易じやない。

「よつ……と」

まず慎重に1歩目。ここから無理な態勢が連續で続く。横向きになつたり、ジャンプして乗り越えたりした。汗をかいてくるが、それも赤外線に触れればアウト。恐らく檻みたいなのが出てきて捕まるだろう。

「ん?」
「は」

赤外線が何本も通り人間が通る隙間も厳しい。ここを抜けたら俺の仕事は終了かな?

「ぐつ……！」

「あの態勢で……。彼のバランス感覚はどうなってるんです？」
「地軸を読み取る力とありますか、足が地についているだけで誰かの重心のかけかたとかがわかるそうです」

よつしゃあああー！通ったぜええー！赤外線の解除ボタンを押し、武内さんと渦木さんを通す。ここから研究施設っぽいところに行くみたいだ。

カサカサカサ…………、

と嫌な音がした。武内さんのライトで照らすと、

「蜘蛛！？」

「いいえ！あれは爆破型のロボットです！近づかれるとドッカーンですよ！！」

数は3桁いくかいかないかの量だった。勿論、椿さんみたいに武器は持っていないし、素手でやつたら勿論ドッカーンだよ。

パンッ！

といい響きと共に硝煙の匂いもしてきた。今のは渦木さんが撃つたのかな？

「1発じゃ壊れません。武内さん、射撃経験はありますか？」
「いいえ、基本的に護身術なので」

この数相手に1人じや厳しいな。どこかのゲームと違いワンタッチでリロードできるわけじゃないからな。

「1回引き上げましょ。予想以上に警備が厳しいですね」

「次はもっと厳しくなるんじゃないかな?」

「それなら応援を呼びます。こういうのが得意な知り合いがいますね」

今日の潜入は終了。楽しかったけれど再深部まで行けなかつたのは悔しい。

「今日はご苦労様です。黒崎さんも」「次は見張り以外の仕事をしてえな」「しかし、ここまで厳しいとなると……怪しいですね」

別に分校への嫌がらせはそこまで隠す必要はない。恐らく混黒高校の重要な秘密かもしけれないな。

「こういつ警備を破るプロに心当たりがあるんだけど、次に呼んでいいか?」

「黒崎さんの知り合いにそんな人いるんですか?」

超能力持つてている時点でどんな警備も破れそうだけだ。

「念のためにもう一人呼んでおきましょっ」

解散したのは8時だった。家に帰つてアカネに心配され、チハに部活に来なかつたを聞かれ、梨子になぜか空き缶を投げられ、部活が地獄になつたのは言つまでもない。

3回表 神桜（後書き）

作者「お前ら後書きだからって夢の共演するな」

ジナイダ「なぜだー？」

グントラム「後書きしか出れないかもしれないんだろうー？」

エアレイド「私なんて靈体なんですよー？」

ホンフリー「私は登場するみたいですね」

京介「知り合い設定かよ」

作者「だつてホンフリーさんは13も14も目立つていただろ

ジナイダ「ジナイダも負けないゾ？」

カリオペ「自分は？まず本編で未登場なんだけど」

作者「続編とかで出てきたら出すよ」

洗谷「私は一般人として出されても違和感ないんじゃないか？」

作者「確かに。でもそれでいいのかよ？マゼンタは厳しいな

マゼンタ「なぜ？」

作者「あの格好をどうにかしら」

犬井「…………帰る」

ルチア「るちあは？」

作者「出るんじやないか？つーか女は全員出すかも」

ジナイダ「ならジナイダもだな！」

エアレイド「なら私も！」

カリオペ「（まず性別すら不明なのに……）」

3回裏 平和（前書き）

あくまでもオリジナルのお話です！！

「」おかしいとかあると思いますが、キャラクターを全員出すのは
難しいです。

天月五十鈴と娘の沙也香をどのように出すかとか、特にパカードイ
を出すタイミングが揃めない！！

今回は、ウ・ホンマー視点です。

3回裏 平和

少年を助けたのは氣まぐれだった。銃撃戦に巻き込まれた少年の表情は、悲しみ、悔やみ、絶望ではなく、無表情だったの。みたところ小学生の3、4年生の子どもなのに、泣きもしなかつたなんて珍しい子だと思っていた。

「大丈夫？」
「…………うん」

無表情の少年は力なく頷いた。銃弾がかすつて血が流れているのに……。無視できないわよね？

「お家はどこ？」
「…………あっち」
「私が送つてあげるわ」

少年の手を握ると震えていて私から離れようとしなかった。

「着いた」
「あら？」「」なの？
「うん」

少年は鍵を出して自分で玄関の扉を開けた。私が帰ろうとする

「ダメッ！！帰らないで！！」
「…………あの？私も家に入るの？」
「うん…………」

少年が潤んだ目でこっちを見てくる。小学生の頬みだから聞くしかないわね……。

「わかつたわ。…………でも寝たら勝手に帰るわよ？」
「やつたあーーーー！」

はしゃぐ少年はさつきまでの顔とは違った笑顔だった。そして「わーい！」と言ひて抱きついてきた。

「ちゅ、ちゅっとお！？」
「父さんも母さんもいなくて淋しくて怖かったの！家に1人が淋しいの！」
「…………」

少年は泣きながら言つてきた。親も親だ。なぜか弱い子供を1人暮らしにするのか？

「僕は黒崎京介です！」
「私はホンフリーでいいわよ」
「よろしく！ホンフリーさん入つて入つてーーー！」

黒崎君に手をひかれて家に入る。小学生1人だけ住んでいる家にしてはきつちりしていて、『ミニの分別、部屋の掃除も行き届いていた。

「まず、手当てしましょうね？傷口見せて
「うんー！」

傷口の手当ての後、話してくれた。黒崎君は甘えん坊かと思つていたけれど、幼稚園の頃に両親に甘く育てられ、人に甘えたい時期

に親がどちらも外国暮らし。私に甘えられてもねえ……。

「黒崎君？」

「…………スー」

「寝てますか？では、私は帰るとしましょうか」

黒崎君、もう会うことはないかもしされませんが、お元氣で。久しづりに家族の気分を味わいました。

「ある人の調査ですか？」「うん。超能力者でもなく、サイボーグでもないのに便利な能力を持つているんだよね～」

「その仕事を私が？」

仕事の話だけれど気が進まないのよね。私の超能力でコピー出来るかもわからないのに。普通の人間の能力をコピー出来るのかしら？

「個人情報はここに置いとくから」

「はあ……」

個人情報を手に取り、中身を開く。名前は…………、

「黒崎…………京介！？」

「知り合いかい？」

「ええ、まあ」

まさかあの時に助けた少年がそんな力を？

「ちようどいい。その子と接触してくれ」

「えつ？」

「その子の信頼を得てくれ。その能力はボクも見てみたいんだ」

その気になれば、フランシスの超能力で連れてくる」とも出来るしどうに頼めばやつてくれるだろ？

「その仕事の担当は私だけでやらせてもいいわ」

「うん？ 念のためにルチアくんにも来てもらおう」と

「その必要はないですよ？」

ただ1回会つただけなのに、その子を守りたいしていた。理由もわからないままだつたけれど、助けたのも気まぐれではなかつたといふことなのかも。

「珍しいわね？ ホンフリーが普通の子供の調査を真面目にやるなんて

？」

「あら？ ハアレイドさん。いらっしゃんだですか？」

「私も会つてみたいな～。黒崎つて人にさ」

……ハアレイドさんは個人行動はせず、ジオットさんの護衛をやるはずなんですがね……。

「私のお田付け役ですか？」

「まあ～それは秘密よ」

小さい子供にナンバー2とナンバー3が出向くのもおかしいと思いますけどねえ……。

「別に構いませんが、姿は消していくください」「わかつてますよ」

田曜日の商店街に黒崎君がいるみたい。ピンクちゃんにお願い?して調べてもらいましたわ。

「あの子ですね」「あの子供ですか?普通の男の子ですね」

先回りして黒崎君の視界に入るよう立つ。すると黒崎君は私に気付いたのか目を見開いている。

「お久し「ホンフー も～ん!…」ぶつて、ちょいとおー!?

黒崎君は私に向かって走ってきて飛び付いてきた。街中なので勿論、通行人+エアレイドさんに見られる。

「あの…………恥ずかしいんですけど」「ホンフー もん!また家に遊びに来てよー!」「黒崎君!手を引っ張らないでください!…」

黒崎君は無邪気な笑顔でまた家に手を繋いで行くことになった。

「あれ?私、邪魔ですか?」

エアレイドさんはしつかりと見てたみたいだった。

「最近、変わったことある?」

「んーとね? バランス感覺が凄い良くなつたんだよーー!」

黒崎君は目をつぶり片足で椅子の上に乗つた。ブレることはなかつたけれど、バランス感覺だけでジオットさんが興味を示すことはない。何かしらの影響でバランス感覺が強化されてるだけだといつことつてどこかしら?

「凄いわね? それなら一輪車とか樂々でしちゃう?」

「うん! スポーツが凄い出来るようになつたんだ!」

運動神經の強化は能力ではないのであり得ない。自分の意志で身体のあらゆる器官を強化するなら別。しかし、それではバランス感覺の説明がつかない。バランス感覺はすなわち重心の制御。重心は身体強化でどうにかなる以前に逆におかしくなる。黒崎君の能力は……?

「ホンマーさん! 何かしようよ?..」

「いいわよ? 何をするのかしら?..」

「キャッチボール! !」

外の庭でキャッチボール。黒崎君の身体能力を測るいい機会だわ。

「えいっ！！」

何球かキャッチボールしてるけれど、変わった様子はない。私が誰かと楽しくキャッチボールをしてるのが一番変わってるわよね……。

「おつと……」

しまった。考え事してたらコースが！？黒崎君は壁に向かつて走つていて気付いていないみたいだし……！

「黒崎君！壁……」

「よしつ……え？ わつ……？」

私は黒崎君が壁にぶつかると思った。……けど、ボールをキャッチした後、壁を蹴り空中逆回転をして着地した。

「…………！ 見た！？ 僕今、バック転したよ！？」

「…………ええ、凄いわ黒崎君！」

「（今のは明らかにバランス感覚の問題じゃないわ。体操選手並の運動神経ね）」

あ、Hアレイドさんいたんですか？ てっきり黒崎君の家に入つてから気配が無くなつたと思つたんですがね？

「あれ？ 家に誰かいる？」

「え？ なんでそんなことわかるの？」

私も泥棒らしき人がいる気配を感じましたが、黒崎君が気付くほど大きな音はなかつたはずです。……能力、でしょうか？

「私が調べてきます。黒崎君はソードジリとしててください」

「うん」

リビングには誰もいない。玄関から入ったなら、……場所的に黒崎君の部屋にいそعدすね？部屋に近づけば近づくほど、物盗りの音が大きくなつてきました。

「誰です？」

「ぐつ！？そこをじけ！！」

「私の知り合いの物盗りはやめてくださいよ」

「くそつ！！」

ナイフ！」とさで私を倒せると思つているんですかね？甘く見られたものですよ。

「ホンマーさん！…危ない！…」

「つー？黒崎君！？」

何といふことだ。黒崎君が私を助けよつとしているのだ。私は超能力者だ。マフィアが100人いたつて負けない。超能力抜きでも25人は相手できる。……でもこの子を守りながらは厳しい。あの時の過ちのことを思い出してしまふ。黒崎君を助けた時からそうだったのかもしれない。この子は私の大事な人とよく似ていて……。

「ぐつ！？ぐわああああ！？」

「世話が焼けますね～。取り敢えず生かしますか」

エアレイドさん。助けてくれてありがとうございます。そう言いたいけど黒崎君に勿論、靈体の気配を感じ取るのは無理だから。黙つ

ておいで。

「無事、ですか？」

「……うん。グスツ」

「ほら、男の子が泣いちゃダメですよ？怖かったのはわかりますが」「ホンフリーさんがいなくなつたら……また一人ぼっちだもん……」

…

返す言葉がない。この子にとつては私という人間はどういう風に映つているんだろうか？どう思つていようとも……私は悪人なのだ。超能力者をたくさん生み出し『あの超能力』が出るまでは、私は諦めない。そのためにたくさんの人々が犠牲になつているのに、それを使い捨ての道具の様に見ている私は紛れもなく……悪党だ。

「（私は何でこんな超能力者と子供の平和な劇を見ているのでしょうか？少し和みましたが）」

「ほらほら、私は無事だから。シャキーンとしなさいー！」

「……うんー！」

この後に警察を呼び犯人を引き取つてもらいました。黒崎君は「今田も一緒に居てよ！」と言われましたが、仕事があるといつことど1日が終わりました。

「どうしたんだ? ホンマーらしくないゾ?」

「ジナイダですか? 今の仕事ですよ」

「子供のお守り役か?」

「そうです。会うのが昨日で4回目でした」

会つたびにバランス感覚（黒崎君はそう思つてるだけ）が成長している。私が家の近くに来ているのがわかつたらしい。4回目では、他の人の重心のかけ方までわかるとか言つてましたが、まだ能力が何なのかわかりません。

「私も…………平和ボケでしうかね?」

「ジナイダも家族の一員として働いているが…………家族というのも悪くないゾ?」

「家族ですか…………。それは昔に置いてきたと思つていましたよ」

私にも平和というのがあっていいんですかね? また昔みたいなことがあるかもしない。…………その時は私が守ればいいんだ。今私は負けない。

「しかし、黒崎という男も運がないな。普通の人間ならジナイダ達と関わることはなかつた」

「私と黒崎君は仕事の前に一度会つているんです」

「何があつたのか?」

「銃撃戦に巻き込まれていたんですよ」

「ジャジメントか?」

「それはわかりませんね。一瞬で殺つちゃいましたから」

5回目の仕事だ。心の奥底では楽しみに思つてゐるのでしょうか?

ちなみに友人としてジナイダも来ていています。

「ジナイダ？本当に会うんですか？」

「ホンマーの友人ということなら納得してくれると言つたのはホンマーだゾ？」

呼び鈴を鳴らす黒崎君はドタドタと走ってきたけれど、

「あれ？ホンマーさん？どちら様ですか？」

「私の友人もお連れいたしました」

「？なぜ扉を開ける前に2人いるのがわかるのだ？」

「そういう能力なんです」

扉が開く最初の笑顔が一転し、ジナイダを見ると頭に？マークをいっぱい浮かべてるみたいだった。

「えつ……と」

「ジナイダだ。ホンマーの友人だ」

「黒崎京介です。よろしく！」

「ん？何だこの手は？」

黒崎君はジナイダに握手をしようとしている。ジナイダに黒崎君は怯んでないですね。

「ジナイダ、握手ですよ。手と手を握り合ひ」とですよ

「……これも平和というやつか？」

「……そうですね」

黒崎君と会つたのですが、悪党でも平和というのがあつていいんですね。でも、これから黒崎君はジオットさんに会わせないといけない。ジオットさんに気に入られれば平和と無縁の生活になるでしょ

う。…………黒崎君は私がいなくなる平和な生活と、平和と無縁の生活。どちらを選ぶんでしようか…………？

「ホンマーさんって男だったの！？」
「？知らなかつたのか？」

……今が一番平和な気がします。

3回裏 平和（後書き）

梨子、桜空、漣「 「 「 「 「 「

京介「…………何だよ？」

梨子「京介って家じやあんな感じなの？」

京介「ガキの頃だろ！？」

優輝「子どもの頃でも京介はクールだったよね？」

作者「そつ責めるな。幼稚園の頃に甘く育てられて、小学生の頃に1人暮らしだぞ？」

桜空「ホンフリーさんルートですよね？これ…………」

ホンフリー「京介君はあの頃は可愛いかったわね～」

漣「あれ！？いたんですか？」

ホンフリー「泣き田で甘えてくる京介君はあれね～萌えって感じよ？」

京介「やめてくれ～～恥ずかしさのあまり死んでしまうそうだ～～」

作者「さすがツンデレ。普段はクール、ホンフリーさんはツンデレか？」

エアレイド「それはクーテレですよ?」

京介「テレでねえよ!...尊敬してんだよ!...」

桜空「ズルいです!私も泣き田で甘える黒崎君を見たいです!」

ホンフリー「実はその時撮った写真が

京介「うおおおい!...やめてくれホンフリーさん!...」

ジナイダ「ホンフリーが超能力を見せるシーンがないゾ?」

作者「この裏話は続きあるから」

ホンフリー「だつて一緒にお風呂!.....」

京介「それはない!...勝手に捏造すんな!...!」

作者「あつ、それいいな」

京介「うおおおい!...」

4回表 水着（前書き）

話し方とか、性格とか、何か地味に違つ氣がするのですが、そこはスルーでお願いします。

今回は初の長話なので、区切りがおかしいです。

では、本編です。

4回表 水着

「海だ～っ！！」

「海です～っ！！」

「泳ぐぞ～～！！」

はい。海に来ちゃいました。え？潜入の話？それなら夏休み明けになつちやつたんだよ。何でも夏休みだから警備が厳しいらしいんだとよ。で、終業式が終わつてその次の日の朝つぱらが集合だつたので、寝呆けているアカネを連れて電車へ。午前9時に海に着いて今に至るわけだけど、電車内は俺とチハ以外は全員寝てた。

「荷物置くから戻つてこい～～！梨子！アカネ！～～チハ～～！」

泊まりだから部屋も予約していく4人2部屋で過ごすことになった（アカネは俺らの部屋になつた。本人希望）。

「各自着替えてから、ここに集合だな

「了解！」

男子の部屋に俺、優輝、越後、アカネが来て……、

「おい、アカネ？お前はあつちだろ？」

「う、うん。俺もさすがにアカネちゃんはあつちだと想つ」

「俺でもわかるぜ？アカネは女子だろ？」

男子3名がまともなことを言つた。優輝はともかく越後がまともなことを言つただと？アカネは梨子に連れていかれて、ようやく着替えをすることが出来る。

「優輝つてあんまり筋肉ないのによくあんな球投げるな?」

「京介だつて4番なのに、そこまで筋肉ないでしょ?」

俺の場合は重心移動や、相手のピッチャーの投球が読めるようになつたからな。打ち損じは基本的にないぜ?

「越後は…………やっぱり筋トレしてんだ?」

「ん?当たり前だぜ!ヒットを打つて4番に繋ぐのが俺の役目だからな!」

越後の長打で俺の番が回つてくるとだいたいチャンスが多い。敬遠される」ともあるけど、越後の打撃にはお世話になつていてる。

「全員、トランクスか?」

「俺はこれしか知らないんだよ」

着替えが終わつたので男子3人で集合場所で待つ。まだ誰も来ておらず、優輝は少しあごどしづしながら、越後はあくびしながら待つていた。

「お待たせです!」

「アカネちゃん!走らないで!」

はしゃいで走つてくるアカネとあわてて追う浅井が来た。アカネは普通の格好だったが、浅井はよくわからない格好をしていた。女子の水着はわかんないだよな…………。

「浅井さんはワンピースかあ」

「「ワンピース?」「

おや？越後もわかつてないようだつた。

「えへへー。桜華から借りてきました！私には少し派手なような気がしますけど」

「似合つてるんじゃないかな？」

と俺が言つたら浅井の顔が赤くなり俯いてしまつた。あれ？傷つくこと言つちゃつたか！？

「あ…………あの」

「アカネはスルーですか！？」

「アカネも似合つてるぞ」

「…………京介つて珍しい天然なのかな？」

アカネが「ワーッ！」と言いながらビーチバレーのボールを持ってきた。

「ちょっと待てよ。ビーチバレーは泳いだ後にやるもんだ」

こう言いながらも女子の霧生夏菜。梨子の親友らしいんだが、性格が梨子に似てるが俺と同じくトラブルを処理する側である。昔は一緒にサッカーとかするほどアウトドア大好き女の子だった。今の趣味は料理らしい。

「こら～置いてくな！！」

「梨子さん！1人にしないでくださいよ～！！」

続いて梨子が来て、チハが最後に来た。チハが来た時に優輝が目を逸らしたのはなぜだろうか？

「よつ！京介」

「よう、梨子」

二二二

「水着につつこみなさいよーーー！」

少しの沈黙の後になぜか梨子に怒鳴られてしまった！おかげで周りの人見られただじゃないか！？つっこめと言われてもなあ。

「梨子。泳ぎやすそうな水着だな」

「へー!!? 深い微妙なところまで!!? 水着だけじゃなく

「ん？ 梨子とその水着似合つてゐるぞ」

色合いが合つてて俺はいいと思うんだけれど。梨子の水着は薄い青色で浅井とは違つて普通の水着だつた。

「さすが京介！ わかつてゐるね！」

チハの水着と言われても…………。少し肌の露出が多い氣がするのは
氣のせいかな？………… といふかそのせいで優輝が田を逸らしたんじ
やないか！？

「チハ、似合つてゐな」

「何か適当になつてない?」

京介？

チハめ……。余計な」とを言つなよ。断じて適當ぢやないぞ? と
いうか、女子に「似合つ?」つて聞かれて「似合わない」つて答え
れるかつ! ! 似合わない水着つて何だよ! ? どんなのだよ! ?

「いや、俺の心からの本心（女子は皆水着が似合ひを考え）だ」

「黒崎？ 田が泳いでるぞ？」

霧生ーー！ 今日は何で地雷発言を畠で言いまくるんだーー！ ？

「…………まあ、京介に似合ひてるって言われたから満足かな
「そうですね…………」

何とか修羅場を乗り切つたようだつた…………。梨子とチハが組み合
わさつたら最強なんじゃないか？

「黒崎、泳がないのか？」

「まだいいや。霧生は？」

「私も泳ぎたいんだけど…………」

苦笑いしながら喋る霧生。アウトドア派でスポーツが大好きだから
な…………。と思つていただけど、

「泳げないのか？」

「ああ、もう！ 何でそんなストレートに言うんだよーー！」

霧生は少し拗ねた様子で梨子達の方を見ていた。優輝が追っかけら
れてるみたいだけど、何の遊びかな？ 鬼ごっこにしては随分と必死
だ…………？

「あ、沈んだ」

「優輝。冥福を祈つてゐる」

その後、プラーと浮いてきた優輝には意識が朦朧としていたので、

避難をせました。

「泳ぎなら梨子に教えてもらつたらいどつだ?」

「そうしたんだけど、『やつて慣れる』としか言わないんだ」

梨子のことだから、教えるより遊ぶことを優先しやがつたな……?
チハも泳げるし、教え方も上手いはずだけど、

「チハと面識ある?」

「初対面だぞ?」

初対面じゃやりにくいよな。アカネはまず浮き輪使つてるし、浅井
は少し慣れてないみたいだし、越後はどうやって教えるんだ
!?
もしかして全部「俺について」みたいな勢いとか!?
なると俺と優輝だけになるけど……。

「俺が教えてやるか?」

「黒崎が? 梨子に悪こよ」

霧生は何を遠慮しているんだろうか? 確かに元々梨子に教えてもら
うつもりだったみたいだけど……。

「いこつていこつて。早く笛と泳げばいい」

「……じゃあ、お願こじよつかな」

霧生を海に連れてきたのはいいんだけれど……。どこまで出来る
んだろうか?

「水の中で田を開けるか?」

「それ位なら出来る」

俺と霧生は海に潜り目を開く。スポーツ万能の霧生には簡単にしぶ、水の中で親指をぐつと立てこじらを見てきた。

「なら後は泳ぎ方だな」

その時、後ろから歓声があがり俺と霧生は振り向く。そこには梨子とチハがビーチバレーで争っているみたいだが…………？

「気に入ら負けだ。クロールの練習するか？」

「ああ、そうだな」

取り敢えずの指導。「やつてみろ」とやらせねば、すぐこ出来るようになる。おかげで短時間で済んだな。

「よしーちゅうとあそこまで泳いでくる」

さすが霧生。クロールを泳げるよくなつたな。小学生の頃に一緒にサッカーをしていたけど、運動神経なら女子の中なら1、2位を争うのに、運動部に入らないのは勿体ない気がするな。

「いい感じだ。今のところクロールだけでいいかな」「泳ぐのって楽しいな……」

霧生も泳げるよくなつたし、皆でビーチバレーでもするかな？

「おーいー梨子……」

浜辺で休んでいる梨子を呼び掛ける。反応しないので近くに行つて呼ぼうとしたが、

「ぜえぜえぜえ……」

「はあはあはあ……」

梨子とチハ、だらうか？さつきまでビーチバレーをやつていた
みたいだが、ここまで疲れてるつて何してんだよ……。

「大丈夫か？」

「……まだ51対51」

「……2点差をつけて終わらせてやる……」

結果は100までいったみたいだつたな。疲労困憊の2人は部屋で
休むため皆でやろうとしていたスイカ割りを休む羽目になったとさ。

「雨崎さん。右ですよ？」

「優輝！フルパワーで行けっ！！」

「越後。ヒントを出せ」

「雨崎！反対だぞ？」

優輝がスイカ割りに挑戦中。ヒントは全くのたらめ…………どころ
かまずヒントじゃない人も何人かいる。アカネなんてスイカの位置
をずらそうとしていたので、浅井が持っている。

「京介！ヒント！」

「右に50メートル。そして左に8メートルにスイカがある」

「嘘つくなーー！」

「本当だ。ちなみに全部で14個ある」

「それ売店じゃないか！？」

結局、優輝はなぜか惜しいところまでいった。ラストは俺だけ田隠ししても場所がわかるんだよな。

「京介！右だよー！」

「嘘をつくな。右には林しかない」

「京介！そこだ！！振り下ろせーーー！」

「まだ1歩も動いてないのにスイカがあつたらゲームにならないだろ」

「黒崎！前に80メートルだ！！」

「田隠しでの水泳は危険すぎるだろーーーアカネに言つたらマジで行くぞーーー！」

「黒崎さん。斜め右にスイカです」

「…………本当みたいだな」

まあ、足の感覚でどこにあるかはわかるんだけど、斜め右に……。

「あれ？スイカ移動してないか？」

素朴な疑問。スイカが俺に向かつて転がつて来てるんだが？
アカネだな？

「どおりやーーー！」

「ピチャツー！」

よしー当たったなー！動いているからって大したことないぜー田隠
しをとつてスイカを確認する。

「 「…………」 」

おかしい。どうしよう。今の状況を整理したほうがいいかな？

スイカを割つた。

そのスイカは他の人のみたいで「コツイおっさんにスイカがかかつて
る。

なぜかわからないが見つめられてる。

俺、猛ダッシュ！

「お前らー！何かわからんが死にかけたぞー！あの田は俺を殺る気
だつたぞー！？」

「すみません。私が冗談を言つたせいで……」

「京介も売店に行かせようとしてなかつたかい？」

素直に浅井に謝れ、よく考えたら俺も冗談言つてたな。

「予備のスイカをその人に返してこよつよ」

「うん。そうしたほうがいいな」

で、越後と俺が返しにきました。

「さつきはすみませんでした。予備のスイカを持ってきましたので

「いや、気にしてなかつたがありがとう」

意外と氣さくな人だな？筋肉ムキムキで少し怖いんだけどよ。

「それにして……」

「？」

「いい筋肉をしてるな？何の部活をしてるんだね？」

「野球だよ！やつぱり男は野球が一番だよなー？」

「あ、ああそудаな」

目付きが怖い。殺る氣の漢字が間違つてる氣がする。むしろ犯る氣のほうが……。

「実は俺もプロ野球の筋肉マーチなんだが」

「マジかよ！？何か筋肉のつき方が違うなー」と思つていたんだ！」

「ほう？わかるのか？筋肉のつき方が？」

やべえ。ここから消えたい。空気の様にスースッと消えないかな……。
……。

「やつぱり官取選手の筋肉は凄えと思うぜ……」

「官取は俺の担当だよ。見所があるな君ー」

「俺は越後竜太郎っすー！」

「俺は鬼鮫清一だ」

俺は空気の様に去り、その場を離れた。の人と関わっちゃいけない。というのが俺の頭に響いている。ソイヤー・ソイヤー・ソイヤー！と聞こえてきたのは幻聴だ。うん。

「あれ？ラは？」

「は越後のことだぞ？再確認しどくが。

「男と男で筋肉の話で盛り上がってるよ
「…………うづえ」

霧生は何か想像したらしく、凄く嫌な顔をしていた。もつもまでの俺も多分、そんな顔をしていたんだろう。

「人数減っちゃいましたね…………」

「あれ？ 優輝は？」

そういうえばいないな。越後とスイカを渡しに行つた時は居たのに。

「千羽矢さんの様子を見に行くらしいです
「……水着のまま部屋で休んでいるのか？」

少し険しい顔で霧生が聞いてきた。え~とビーチバレーをやつて2人とも倒れたから運んだからな…………。

「多分、水着だ」

「私もちよつと様子を見てくる」

霧生もいなくなつて俺、浅井、アカネだけになつちやつたな。このメンバーでやることか…………。

「昼飯でも作るか？ そろそろ1時だし」

「そうですね。霧生さんも喜ぶと思いますよ」

「お兄ちゃん！ アカネは何をすればいいですか？」

アカネはあれだけ暴れて元気なようだ。梨子とチハが暴れすぎなんだ
けか。

「梨子達には焼きそばでいいか。そこで買えるし」

「私達が買つてきますよ。アカネちゃん、行きましょうよ」

ついに俺1人か……。一丁は定番の焼きトウモロコシの準備でも
するか。

4回表 水着（後書き）

ホンフリー「今日は何を話しましょうか？」

京介「毎回いるよな。ホンフリーさん」

エアレイド「後書きなんですから何をしてもいいんですよ」

竜太郎「官取はプロ野球選手なのか？」

作者「鬼鮫の犠牲者1号だ」

京介「2号がいるのか……」

夏菜「私って泳げない設定かよ！？」

作者「いいだろ？ちょっと欠点があると可憐いって聞いたことがあ
る」

京介「それ絶対、電視から聞いただろ……」

作者「よしー次の裏話はホンフリー×京介で」

梨子「またー？」

京介「俺が読者に変な田で見られんだろ」

ホンフリー「もう見られてるんじゃないからしら？」

作者「ミーナ、ホンフリーはバグとか言ってたからな」

ミーナ「ワタシもですか」

ホンフリー「准さんは彼女候補入りましたからね」

京介「次の裏話は普通のだろ?」

作者「うーん。当初は表と同じシーンを書こうと思ったんだけど」

アカネ「アカネの昔話で出来なくなつたと」

作者「その通りだ」

京介「取り敢えず、もう鬼鮫は出せないでくれ.....」

4回裏 勝負（前書き）

そろそろパワポケ関係のイベントをやろうかな。

バトルディッガーとか秘密結社とかは無理だけど、カエサリオンやらジャジメントとが出します。

今回は石川梨子視点で。

4回裏 勝負

あたしの名前は石川梨子！今日は海に行く予定だつたけど、朝早く集合なのに遅くまで起きてたせいで眠い……。

「おはよっ……！」

「…………漣？おはよう。ふああ……」

朝6時で始発だからね。5時起きになつちやつたけど、京介と海に行けるならあたしは嬉しいな。

「皆眠そだな！？」

「あ、京介おはよっ」

来た来た。あたしの幼なじみの黒崎京介。勉強、スポーツ、ルックスは全部申し分ないから皆に人気なの。あたしは京介に特別な感情を抱いている。昔、川に落ちた時に助けてくれたのは京介だつた。その頃からあたしは京介のことが好きになつたのに……。鈍感すぎるよ。

「おーいアカネ。そろそろ自分で立て

「んう。…………ああアカネハウスがあー

「ダメだ。寝呆けてる」

京介の義妹のアカネとも仲良くなつたけれど、アカネが羨ましいわよ。京介に手料理作つてもらつたり、朝に起こされたりなんて……。

「おいおい、チハ以外眠そだな

「私は早く寝たのにおーイは遅かったみたい」

「そろそろ電車が来るね」

夏菜も漣も目が閉じちゃったね。あたしもそろそろ限界が近いのに

。

「起きるーーアカネ以外は自分で歩け」

……京介ごめん。あたしも……限界。

「うへーん
やつと起きたか
梨子さんも眠かったんですね」

起きると京介とチハちゃんがいた。隣の夏菜は寝てるみたいだけれど……あれ？ あたしはどうやって電車に入ったの？

「でもズルいよ。京介君はアカネちゃん以外運ばないって言ったよね？」

「突然、梨子が倒れそうになつたんだからじょうがないだろ」

…………もしかして京介に運ばれた？ 話の内容からして、肩を支えら

れたのかな？覚えてないなんてあたしの一生の不覚ね。

「3人で何かするか？」

「私、一応トランプ持ってるけど？」

「あたしはバス。まだ頭が起きてない」

隣で京介とチハちゃんがスピードをやつしている。…………レベルが高いわよ！…どっちも人とは思えない動きしてるよ。

「引き分けか」

「えつ！？スピードで引き分け？」

あたしは場を見てみるとお互いに出してないカードは一枚。…………しかも1回も止まりずにやつていたよね？本当に人間かな？

「次は～小波海水浴場」

「着いたか～」

「梨子。霧生を起こしてやつてくれ」

「うん」

夏菜の肩をゆする。京介はまたもやうと浅井と雨崎とアカネを起こしている。夏菜は目を覚まして周りを確認すると「わっ！」と言つて飛び上がつた。

「どうしたの？夏菜」

「梨子～口の周りに何かついてないか？」

夏菜の顔を見る。特に変わった様子はない…………ね。

「大丈夫だよ」

「寝言は！？」

「えーっと。霧生さんですよね？」

「う、うん」

あ、そつか。チハちゃんと夏菜は初対面だったね！この2人もいい仲になるとあたしは思うね！－

「突然、『料理は火力だぜ！』って言つてましたけど……」

「つー？……恥ずかしいな」

きつと京介も聞いていたのかな。京介の性格は人思いだからきつと黙つてくれるよね。

「お降りの際は忘れ物を！」

「皆、荷物持つたか？」

その言葉を言つた後、電車の扉が開いた。

「海だーっ！」

「海ですーっ！」

「泳ぐぞーー！」

あたし達3人は海に向かつてダッシュ！－1回海に来たらこれをやらないとね！－

「荷物置くから戻つてこい！－梨子！－アカネ！－チハ！－！」

京介が大声で言つたので、あたし達は戻つた。アカネだけは本気で海に向かつて走つていたので確保しました。

「各自着替えてから、ここに集合だな」

「了解！」

男子更衣室にアカネが行つたのは謎だつたけど、女子皆で更衣室に入つた。

「夏菜つて胸大きいね？」

「突然何を言うんだよ！？」

無言だつたから女子のスタイルについての話をしようつかな？

「チハちゃんはスタイルいいですよねー！？」

「ありがとうございます。浅井さん」

確かにチハちゃんも勉強、スポーツ、ルックスはどれも申し分ない。後輩に天才美少女がいるという話を聞いて見に行つたあたしは少し驚いた。京介と仲良く話していただだ。その後聞いたら「優輝の妹で幼なじみだ」と言つていたのにはショックを受けた。あたし以外にも幼なじみの女の子がいるなんて……。

「梨子さんだつてスタイルいいじゃないですか？」

「私もいいとします！」

「ありがと。でもチハちゃんには負けるね」

今ではチハちゃんと話すようになつたけれど、きっとチハちゃんも京介のことが好きなんだ。桜空もきっと京介のことが好きだからあたしは負けないよつに頑張らないとねつー！

「浅井はワンピースなんだな」

「はい。桜華から借りましたけど、私に似合つかな…………」

漣は白のワンピース。漣のイメージは純粋だから似合つてゐると思つ
…きつと京介なら……。

「京介ってどんな感じの水着が好きなんだろう?」

「お兄ちゃんはですね!普通の水着がいいそうですね!…」

アカネから有力な情報が聞けたけれど、普通の水着が好きってどう
いうこと!…京介って男子なのに部屋にはあつち系の本とかそつち
系のビデオが1本もないんだもん!ありえないわよ!

「それってアカネに対して言つたんじゃないか?」

「お兄ちゃんが『普通の水着が一番いい』って言つてました!…

…………それはきつとアカネが着るならつてことじやないかな?

「準備出来ました!アカネ行つてきます!…!」

「アカネちゃん!1人は危ないよ!」

着替えが終わつたアカネと漣が更衣室を出ていった。

「ああ!…?アカネがビーチバレーボール持つていつたな!…?」

夏菜も着替えが終わり更衣室にはチハちゃんとあたしだけ。チハち
ゃんの水着は少し肌の露出が多くて、男子なら皆が釘付けになりそ
うだつた。

「チハちゃん。京介に色氣つて効くのかな?」

「…………梨子さん。私もこの水着選んで後悔します。普通の水着
で良かつたんじやないかつて」

この海に行くイベントは京介との距離を縮めようとするためだった。そのために男子が喜ぶ女子の水着姿で頑張ろうと思つたのに……。

「…………京介に直接言つてみよっ!」

そうだ。あたしにはストレートで言つまうのが似合つてゐる。せつとそれは京介も思つてことだらう。

「待つて! 梨子さん! ……私まだ準備が…………！」

更衣室を飛び出し一直線に皆のいるところへ。アカネと夏菜は遊んでるし、漣は顔を赤くしてるのは何があつたんだろう?

「こひらへ置いてくな! ……！」

「梨子さん! 一人にしないでくださいよ~! ……！」

チハちゃんも来て全員集合! ……雨崎が田を逸らしたのはチハちゃんのせいね。

「よつ! 京介」

「よつ! 梨子」

「…………」「…………」

しばりぐの沈黙。…………京介は女心が本当にわかつてないね!

「水着につつこみなせこよー! ……！」

あたしの本音を全力で叫んだよ。京介に水着を見せるのは初だよ! ? 「可愛いな」とか「似合つてゐるぞ」とか一言あってもいいでしょ

！？

「梨子。泳ぎやすそうな水着だな」

「……ボケてるのかな？梨子ちゃんを怒り切たら海で地獄を見してやる。

「うわー！？凄い微妙なところがつしまれたー？水着だけじゃなくてあたしも含めてで！」

「ん？梨子とその水着似合ってるね？」

やつた！…京介に言つてもうつた！…昨日新調しこいつた甲斐があつたね！

「さすが京介！わかってるね！」

「京介君…私の好み？..」

チハちゃんの水着に対しても京介は動搖するとはなかつた。後ろの雨崎はめちゃくちゃ動搖してるけど。

「チハ、似合つてるな」

「何か適当になつてない？」

今のチハちゃんの言葉は聞き捨てならないね。適當だつたら喜んでいたあたしが馬鹿みたいじやん…！

「……………京介？」

「いや、俺の心からの本心だ」

「黒崎？目が泳いでるぞ？」

あたしは京介とじっくりお話をしたいところだけど、

「…………まあ、京介に似合つてゐつて言われたから満足かな」

一
セニテスル

さて、海に来たからには遊ひ遊ひ放へいり、漁船に漁船放へるが

「待てええ！！優輝！！」

おーイ! 積みが済んでお仕事か? うーん、

雨崎君を追いかけて沈めたら勝ちという意味不明なゲームをやってるのは、どうしてだろう?

「うなつたひ……」

チハちゃんが海に潜った！あたしとラは雨崎を追いかける！そして
震発動！チハちゃんが雨崎を沈める！

「よっしゃー勝ったー！」

1回戦はチハちゃんの勝ち。でも次は絶対に負けられないね！勝った方が京介君と午後の祭りと組むことになっている。くじ引きで同じ番号同士で行く話だつたけど、仕組んで京介と祭りに行こうとするチハちゃんを止めて（あたしも京介と祭りに行きたいから）、勝負しているのに初戦は敗北。

「2回戦はビー・チバレーね」

「梨子さん！1対1でやりません？」

1対1？チハちゃんめ……。何か企みがあるのね？でもあたしだつて2対2でパートナーを組んだらパートナーによつて勝敗が変わる。

「いいわよ？」

「半面でトス、レシーブ、アタックを1人でやるでいいですか？」

今考えるとそういう無茶苦茶な考えだね。凄く疲れると思つけど、京介との『テート券は譲れないわよ！』

「おーい！梨子！…」

……京介？あたし頑張つたよ……。

「ゼエゼエゼエ……」

「はあはあはあ……」

そう言いたかつたけど、ビーチバレーはただでさえ疲れるのに半面でも15位からマラソンを走った並になつたよ……。

「大丈夫か？」

「…………まだ51対51」

「…………2点差をつけて終わらせてやる……」

その後の勝負はサーブがまともに入らず、熱天下の中ですつと立っていたので、ダウンした。本格的な脱水症状が……。

「トラブルメーカー」といつか自爆してんじゃねえか

京介かな？少しほやけていてわからないや。京介？におんぶで運ばれて……。

「京介…………降ろして！」

「まともに立てないくせにそんなこといつのか？」

他にも運び方があるんじゃないの！？さすがにあたしでも恥ずかしいって！！

「恥ずかしいよ…………！」

「ん？お姫さま抱っこはお断りだ。俺が恥ずかしい

肩貸してくれるだけでいいのに！と言える状況じゃないし、何か言っておんぶで運ばれないのも勿体ないよ。

「しばらく部屋で休んどけ。千羽矢もな。優輝ありがとい」
「……俺も恥ずかしかったぞ」

チハちゃんは雨崎が運んだのかな？京介と雨崎は部屋を出でいった。

「梨子さん。勝負は引き分けにしませんか？」
「え？ 何で？」

チハちゃんは苦笑いして、

「京介君は私より梨子さんを優先して運んだんですよ。口では言わなけれどきっと京介君は梨子さんのことを大事にしてるんですよ」

京介があたしのことを大事にしてる。

「悔しいですけど、私は梨子さんに負けたのと同じです」
「引き分けよ」
「えつ？」
「鬼」つこで負けたからね。一勝一敗だよ」

チハちゃんととの勝負は引き分け。京介と祭りに行くのはくじ引きになる。

「じゃあ、京介君と祭りに行くのはくじ引きですか？」
「うん。負けないからねー！」

そろそろ京介が帰ってくる。仕組みも一切なしの連勝負！京介とのお祭りデートなんて年に一回あるかどうかだから…。

4回裏 勝負（後書き）

梨子「メインヒロインのあたしが何で4番目の裏主人公なのよ！？」

作者「何回も裏主人公で出すから黙りなさい」

ホンフリー「私も海に行きたいわね」

夏菜「無理だな」

千羽矢「無理ですね」

京介「無理を言つな」

ホンフリー「別にいいじゃないですか？」

優輝「係員の人止められると思つたけど…………」

京介「止められるだろ。俺だつて初対面の時に女だと思つたからな」

ジナイダ「黒崎京介は驚いていたな。ホンフリーが男だと知つた時に」

桜空「女じゃなくて良かったです…………」

京介「学校でのイベントはないのか？」

作者「だつて、始まりが先輩の引退時だからね。まあ、体育祭なり文化祭なり出すよ」

千羽矢「質問！私って化け物設定？」

作者「さあな？それは話の流れ次第だな」

京介「野球する気ないよな。これ

作者「当たり前だ。それがパワポケクオリティだろ」

京介「えー？せめて試合の1つ位はいいだろ？」

作者「試合の描[画]って面倒だし」

優輝「えー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8083z/>

野球馬鹿の破茶目茶物語

2012年1月8日19時48分発行